

## 九世紀の入唐僧 — 遣唐僧と入宋僧をつなぐもの —

森 公 章

### はじめに

八世紀には十五、二十年間隔で派遣されていた遣唐使は、九世紀に入ると派遣間隔が大きくなり、承和度の遣唐使は実際に渡海した使節としては最後の遣唐使であつた。約六十年後に寛平度の遣唐使が計画されるが、大使菅原道真の再度の建議、道真自身が九〇一年昌泰の変で左降されたこと、そして九〇七年には当の唐王朝が滅亡<sup>①</sup>してしまうことなどにより、日本の遣唐使事業は終わりを告げることになる。

承和度の遣唐使は二度渡海に失敗し、三度目に漸く入唐を遂げるが、副使小野篁の渡海拒否と処罰、唐の国情不安による賓待の縮小や請益・留学への制限など、従前とは異なる様々な問題が起きている。<sup>②</sup> 篁が乗船予定であつた第二船以外は帰路には使用不可能になつたので、帰国時には新羅船九隻を雇い、当時絶頂期にあつた新羅の張宝高による制海権掌握に守られて帰朝したこともども、東アジア情勢の変化を最前線で感じる機会になつたであろう。また本来請益僧であつた円仁は、張宝高とも密接なつながりを有する在唐新羅人の助力で唐に不法滞在し、入唐求法を続け、五臺山巡礼や長安滞在と会昌の廃仏による還俗など稀有な経験を重ね、その十年間に及ぶ活動の様子は『入唐求法巡礼行記』に記され、承和度遣唐使の詳細や唐の実情を知る良好な考察材料になつて<sup>③</sup>いる。

この承和度遣唐使以降、寛平度の計画までの間にも、九世紀には何人かの入唐求法僧が渡海しており、遣唐使事業終了後には五代十国や宋への渡航、天台山・五臺山などへの聖地巡礼は陸続とし、日本の仏教界、特に天台教団と中国の仏教界の交流、また唐・宋商人の来航による日中間の往来はさらに頻繁なものになっていく。私は先に十一世紀末の入宋僧成尋の渡航記録『参天台五臺山記』の読解を試み、それに関連して成尋に至る入宋僧の系譜をまとめたことがある。<sup>(4)</sup>その他、成尋をめぐる諸問題を検討する中で、承和度以降の入唐求法僧にも触れているが、九世紀の入唐僧の動向については個別に検討を加えておらず、史料整理を含めて、入宋僧への展開をさらに考究したいと思っていた。

そこで、小稿では遣唐使以外の方法によって入唐求法を志した何人かの九世紀の僧侶を取り上げ、遣唐使に伴う請益・留学僧から独自に渡海方法を模索する入宋僧（勿論、撰関家などによる支援は存した）への変化をつなぐ存在の活動形態を私なりに明らかにしてみたい。以下、史料の収集・整理を軸に、九世紀東アジアにおける新たな通交の様相に光をあてる。

## 一 恵運の渡海

承和度遣唐使の請益僧円仁は十年間の入唐求法を終え、承和十四年に帰朝した。その様子は『続後紀』承和十四年十月甲午条に、「遣唐天台請益円仁及弟子二人・唐人卅二人到<sub>レ</sub>自大唐。」と記されている。『入唐求法巡礼行記』巻四承和十四年十月十九日条によると、円仁一行は五人で、唐人は金珍ら四十四人となっており、金珍らは在唐新羅人であったことも知られる（後掲史料01など）。実は円仁は当初張友信の船で帰国するつもりであった（巻四大中元年閏三月十日条）が、その船が既に出帆していたので、金珍らの船に乗船した次第である。

I—01『入唐求法巡礼行記』卷四大中元年（承和十四〇八四七）六月九日条

得蘇州船上唐人江長、新羅人金子白・欽良暉・金珍等書云、五月十一日、從蘇州松江口發往日本国。過廿一日、到萊州界岬山。諸人商量、日本国僧人等今在登州赤山、便擬往彼相取。往日臨行、以遇人說、其僧等已往南州、趁本国船去。今且在岬山相待、事須廻棹來云々。書中又云、春大郎・神一郎等亦乘明州張支（友）信船歸国也。來時得消息、已免也。春大郎本擬雇此船歸国。大郎往広州後、神一郎將錢金、付張支（友）信訖。仍春大郎上明州船發去。春大郎兒宗健兼有此、々々々物、今在此船云々。又金珍等付囑楚州惣管劉慎言云、日本国僧人到彼中、即發遣交來云々。

I—02『安祥寺伽藍緣起資財帳』（『平安遺文』一六四号）

（上略）天長十年奉勅、被拜鎮西府觀音寺講師兼筑前國講師、以為九國二島之僧統、特勾当写大藏經之事。惠運固辞不許、強赴任所、翹競寸陰而顯得心仏之曼荼。寧樂經半紀而叨為首領之浮事、儻值大唐商人李処人等化來。惠運就化、要望乘公歸船入唐、巡禮薦福・興善曼荼羅道場、得見青龍義真和尚、請益於秘宗、兼看南岳五臺之聖迹。船主許諾云、東西任命、駟馳隨力。遂則承和九年、即大唐會昌二年（歲次壬戌）夏五月初五日、脫躡兩箇講師、即出去觀音寺、在太宰府博多津頭始上船、到於肥前國松浦郡遠值嘉島那留浦。而船主李処人等、棄唐來旧船、便採島裏楠木、新織作船舶、三箇月日、其功已訖。秋八月廿四日午後上帆、過大洋海入唐（得正東風六箇日夜、船着大唐温州崇城縣玉留鎮守府前頭）。經五箇年巡礼求學、承和十四年即大唐大中二年（元カ）年（歲次丁卯）夏六月廿一日、乘唐人張友信・元靜等之船、從明州望海鎮頭而上帆、（分註略）旋歸本朝。（下略）

I—03『続後紀』承和十四年七月辛未条

天台留学僧円載、謙從、仁好及僧惠萼等至<sup>レ</sup>自<sup>二</sup>大唐<sup>一</sup>、上<sup>二</sup>奏円載之表狀<sup>一</sup>。唐人張友信等卅七人同乘而來着。

I—04『続後紀』 承和十四年九月庚辰条

入唐求法僧慧雲、猷<sup>二</sup>孔雀<sup>一</sup>・鸚鵡<sup>二</sup>三<sup>一</sup>・狗<sup>二</sup>三<sup>一</sup>。

史料01によると、張信友の船には「日本国僧人」も乗船していたことが知られ、02・03を参照すると、「僧人」とは承和度遣唐使の留学僧として唐に滞在していた円載の謙從、仁好<sup>6</sup>、そして安祥寺の開基となる惠運や惠萼などであった。惠運は02に「經<sup>二</sup>五箇年<sup>一</sup> 巡礼求學」と記されているので、在唐は五年で、承和度遣唐使以降に何らかの手段を用いて渡海し、入唐求法していたことが判明する。

惠運の生涯は02の『安祥寺伽藍縁起資財帳』以外にはあまり材料がなく、安祥寺開基以降に関しても、仁寿三年に権律師、貞観三年には東大寺大仏修理供養の開眼導師（『東大寺要録』卷三）、同六年に少僧都となり、同七年には得度・受戒の制厳重化を申牒したことが特筆されるくらいで、同十一年九月に入滅、七十二歳であった（『僧綱補任』）という（出典を注記したものの以外は当該国史）。02上略部分によると、惠運は東大寺の泰基や中繼を本師としており、阿闍梨少僧都実恵に密教を伝授されたとあり、その後惠運は坂東で写一切經の校検に従事、そして大宰府でも一切經書写を担当している。

では、惠運が入唐を志した理由はどこにあるのだろうか。『安祥寺伽藍縁起資財帳』には、「或銅器等、余昔被<sup>レ</sup>拜<sup>二</sup>太宰府講師兼筑前国講師<sup>一</sup>之日、新羅商客頻々往来貨<sup>二</sup>資銅鏡疊子等<sup>一</sup>。逢<sup>二</sup>著此客<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>備<sup>一</sup>之於道場、用<sup>二</sup>国家講經之餽施<sup>一</sup>、買得者也。」とあり、「はじめに」でも触れた新羅の張宝高の制海權掌握により、当時は新羅商人来日も盛んであった。<sup>7</sup>『入唐求法巡礼行記』卷四会昌五年（承和十二・八四五）九月二十二日条に「新羅人還俗僧李信恵、弘仁未載（弘仁六年）到<sup>二</sup>日本国太宰府<sup>一</sup>住八年、須井宮為<sup>二</sup>筑前太守之時<sup>一</sup>、哀<sup>二</sup>恤斯人等<sup>一</sup>。張大使天長元年到<sup>二</sup>日本国<sup>一</sup>、廻時付<sup>二</sup>船却<sup>一</sup>歸唐国。今見居<sup>二</sup>在寺莊<sup>一</sup>、解<sup>二</sup>日本国語<sup>一</sup>、便為<sup>二</sup>通事<sup>一</sup>。」とある李信恵（卷二開成五年（承和七・八四〇）正月十五日



条には「信恵（住「日本国」六年）」と見える。のように、大宰府周辺には滞留する新羅人が多くいたと考えられる。<sup>(8)</sup>

ただ、恵運も述べているように、そうした新羅人からの舶載品を購入するという環境は整っており、それを利用するには便利であったが、恵運自らが渡海を希望する要因は何であったのだろうか。02には「要望乗「公帰船」入唐、巡「礼薦福・興善曼荼羅道場」、得「見青龍義真和尚」、請「益於秘宗」、兼看「南岳・五臺之聖迹」上」という目的が記されており、密教の求法と聖地巡礼が挙げられている。

#### I—05 承和四年正月九日僧実恵上表文案（『平安遺文』四四四〇号）

実恵大徳請「円行入」唐表。沙門実恵言、伏蒙「弁官仰」偶、真言宗請益・留学僧經「流宕」纔着「岸。如」是之類船上所「忌、縦換」他人、更不「可」乘。仍從「停止」者。左右隨「仰旨」。雖「然」一物共（失力）所、聖皇所輸。今真言宗新始「聖朝」、未「經」幾年、所「遺」經法及所「疑滯」無「由」聞求。此度不「遣」、何所「更求」。元興寺僧円行久習「真言」、稍得「精旨」、於「他学」亦通悟。伏望、以「此僧」為「請益」。但留学從「停止」。若此道於「国家」不要者、敢非「所」望。伏請「天判」。不「勝」鬱念、謹奉「表以聞」。沙門実恵誠惶誠恐謹言。承和四年正月九日律師伝燈大法師実恵。

承和度遣唐使は渡海を果す以前に二度漂没しており、二度目の時には第三船は漂蕩・破裂し、生存者は真言宗の請益僧真濟と弟子真然の二人のみという惨事にみまわれた（『統後紀』承和三年八月丁巳条、『三代実録』貞觀二年二月二十五日条真濟卒伝）。そこで、05によると、こうした凶事に遇った人々が乗船することは不吉であるとして、三度目の出発時には真言宗の渡海僧そのものが拒否されそうになったが、延暦度に空海が将来した真言宗の定着のためにはさらなる經典の導入や宗教上の疑問点解消が必要で、遣唐留学者の派遣は不可欠であった訳である。05では元興寺僧円行が推挙され、『入唐求法巡礼行記』卷一開成三年（承和五〇八三八）十月四日条によると、真言請益円行は大使に随行して長安への京上が許されている。

その後の円行の動向については、「真言請益円行法師入青龍寺、但得廿日雇廿書手、写文疏等」。法相請益法師不得入京、更令弟子義澄著冠、成判官兼從令入京。」（卷一開成四年二月二十日条）、「相見真言請益円行法師、語云、大使在京、再三上奏、請益令住寺裏、勅又不許。後復上奏、僅蒙勅許、令住青龍寺。於義真座主所、十五日受胎藏法、供百僧、不受金剛界法。」（二十五日条）と、中途半端な目標達成の不滿が示されている。唐では安史の乱（七五五〜七六三年）以後は国内情勢が不安定になり、日本の遣唐使も宝龜度、延暦度は唐側の賓待低下や留学者の受け入れ不十分な状況に辛苦するようになった。<sup>(10)</sup> 承和度に至っては状況はさらに厳しくなり、「又留學生道俗惣不許留此間」。円載禪師独有勅許、往留台州。自余皆可歸本郷。又請益法師不許往台州。」（卷一開成四年二月二十七日条）と、円仁の天台山での請益も不可能であるという結論で、円仁が唐への不法滞在→求法継続の道を選択する方向へと進んでいくのである。

こうした中で、円行が短期間とはいえ、青龍寺の義真から伝習に与り、經典の蒐集を行うことができたのは、まだ成果があった方である。しかし、それが不充分であったことは、上掲の円行の言に明らかである。恵運は密教においては05の上奏を行った実恵の弟子にあたり、以上のような経緯を考慮すると、実恵の系統の者が入唐して十分な形で求法を遂げることは、真言宗の課題として残されたものではあるまいか。02によると、恵運の渡海は承和九年のことであり、大宰府における新羅商人との交流、承和遣唐使の帰路は新羅船九隻を雇い、新羅人船頭の助力によって帰国が可能になったという実体験などから、ここに来日した外国商人の船で入唐求法するという新たな方法が創出されたものと考えられる。こうした大きな決断が可能であったのは、恵運の個人的希望だけではなく、真言宗全体としての要請が浮上していたことに留意したい。

(上略) 又徒衆曰、円載乍見日本人、惣作怨家。会昌三年《承和十||八四三》、本国僧円修・惠運来到此山、具知円載犯尼之事。僧道詮和上曰、円修道心、多有材学。在禪林寺、見円載敷出<sub>レ</sub>寺、拳<sub>レ</sub>声大哭、国家与<sub>レ</sub>汝糧食、徒衆待<sub>レ</sub>汝学満、却<sub>レ</sub>帰本寺、流<sub>レ</sub>伝仏法。何不<sub>レ</sub>勤業、作<sub>レ</sub>此惡業。蒼々天々。円載因<sub>レ</sub>此結<sub>レ</sub>怨含<sub>レ</sub>毒。円修從<sub>レ</sub>天台<sub>レ</sub>発、去<sub>レ</sub>明州<sub>レ</sub>已後、載雇<sub>レ</sub>新羅僧、将<sub>レ</sub>毒去、擬<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>円修。修便上<sub>レ</sub>舡、発去多日、事不<sub>レ</sub>著。便新羅却来曰、趁<sub>レ</sub>他不<sub>レ</sub>著。載曰、巨<sub>レ</sub>耐巨<sub>レ</sub>耐《和言阿奈称太、々々々々》。

I—07『行歴抄』大中八年(斉衡元||八五四)二月初旬条

大中八年二月初旬、留学円載、出<sub>レ</sub>剡県<sub>レ</sub>去。此越州管、去<sub>レ</sub>唐興県、一百八十里。臨発之時、他說導、我未<sub>レ</sub>曾聴法華經、所以今夏欲<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>湖州策闍梨処<sub>レ</sub>聴説。若要<sub>レ</sub>聴無。珍対<sub>レ</sub>他曰、遠来求法、要在<sub>レ</sub>聴説。而今山中応<sub>レ</sub>无<sub>レ</sub>講席、闍梨若要<sub>レ</sub>聴去、珍相共隨喜。又珍向導、聞導越州良講座主講説如<sub>レ</sub>法、到<sub>レ</sub>彼聴説不<sub>レ</sub>得。載曰、彼僧向前与<sub>レ</sub>敬文、得<sub>レ</sub>惠運十両金、与<sub>レ</sub>他作<sub>レ</sub>惡文書、毀<sub>レ</sub>謗我宗。所以彼人路上頻逢、我不<sub>レ</sub>相見云々。(下略)

惠運は承和九年に渡海し、承和十四年に帰国しているので、02のように「經<sub>二</sub>五箇年<sub>一</sub>巡礼求学」という形であった。但し、円仁の『入唐求法巡礼行記』にも詳述されているように、承和九||会昌二年(八四二)頃から唐・武宗の会昌の廢仏が本格化し、承和十三||会昌六年三月の武宗死去まで僧尼は厳しい状況下に置かれていた筈である。外国人の僧侶は滞在理由を申告させられ、様々な圧力を感じる程度であったが(卷三会昌三年正月二十八日条、五月二十六日条など)、会昌五年三月には外国人僧も還俗させて帰国を命じる方針になり(卷四会昌五年三月三日条、三||五月条)、円仁も辛苦して帰朝を果したことは周知の通りになっている。したがってこの渦中に入唐した惠運も、充分な巡礼・求法を実現し得たかどうか疑問とせねばならない。

史料06・07は入唐中の惠運の足跡を知る材料であるが、そこには円修なる者も登場している。まずこの円修の人物像を

明らかにすること、恵運の入唐の周辺を考える糸口にしたい。<sup>12</sup> 円修は天台宗の僧で、『天台法華宗年分得度学生名帳』によると、円仁と同じく弘仁五年に年分度の学生になり、遮那業を修行したが、比叡山には止住せず、高雄山寺に行き、師主最澄の膝下を離れたことがあった。<sup>13</sup> 円修は最澄に随行して延暦度遣唐使の一行として渡海した義真に師事したらしく、初代天台座主になった義真が死去する時、「天長十年七月睿山義真寂。以座主位私授円修、大衆不肯、山上鼓噪。真之徒党修之者五十余輩、大衆攢之。勅尚書右承和真綱上山、罷円修座主職。修移和州室生山、承和中入唐、歸住山雲寺（出雲寺力）。」（『元亨釈書』卷三十黜争志九）、「院内雜事、讓授弟子僧円修、私号座主。然而大衆不許、上奏於公家」。仍勅使右大弁和氣朝日臣眞綱登山止其職。因之円修移住大和国室生寺云々。』（『天台座主記』）と伝えられる騒動が起きている。結局、第二代天台座主には最澄の別の弟子円澄（武藏国埼玉郡の壬生氏出身）が就任しており（承和三年十月二十六日に六十六歳で入滅し、以後は第三代の円仁の就任まで座主は空位になる）、<sup>14</sup> 師承関係をめぐる天台宗の裏面史が窺われる。

円修が居住した室生寺は興福寺と本末関係にあり、創建者である修円は一時最澄とも良好な関係にあったが、大乘戒壇創設の頃から対立が深まったようであり、また室生寺には祈雨の寺院という真言的要素があったから、遮那業を修めた円修が身を寄せるには相応しい場所であったと言える。但し、修円は承和元年に死去しており、その後の円修の動向は不明である。06によると、承和十年には唐の天台山に到来しているので、承和九年に恵運とともに渡海したものと推定できる。そして、『山王院藏書目録』には「冥道無遮斎文一卷（故修大徳本、承和十一年從唐将来）」とあるので、円修は承和十一年には帰朝していたことがわかる。

06には承和度の留学僧円載が円修を殺害しようとした旨が記されているが、円修の帰国方法としては、『続後紀』承和十年十二月癸亥条「入唐留学天台宗僧円載之弟子仁好・順昌、与新羅人張公靖等廿六人、来着於長門国。」とある一

行に加わったと考えるしかないと思われる。06の記主円珍は義真に師事、第二代天台座主円澄の時に遣唐留学僧に選定された円載を嫌悪し、義真門下の円修に好意を抱いていたとされるので、円載の円修殺害計画の実否は不詳である。円珍は最澄―義真―円修―堅慧の付法血脈を伝える「大唐国日本国付法血脈図記」に貞観十六年十一月四日の奥書を記しており、これは円珍が第五代座主になっていた時期のことで（貞観十年六月三日就任、寛平三年十月二十九日入滅まで在位）、上述の初期天台宗の師資関係をめぐる争いと関連する行為と推定されよう。但し、06で円修が明州に赴いたとあるのは、円載の弟子たちと一緒に帰国の途に就くためであり、円載はむしろ円修に便宜を供していると解せられる。円修の殺害を請負ったという新羅僧も、在唐新羅商人による日本への帰国を円滑に進めるために助力した人物であったと位置づけるべきである。

ところで、上述の「付法血脈図記」は最澄に天台宗を伝授した唐の道邃と次の広修のところまでの唐・天台宗の付法血脈と上掲の最澄―義真―円修―堅慧という日本・天台宗の付法血脈を認定する内容になっている。この唐で作成された文書に懺堂徒衆として署名している道全は、06で円修を高く評価していたとある道詮に比定できる。但し、この文書の日付は会昌四年（承和十一―八四四）二月九日であり、上述の円修の帰国方法推定よりも後のことになる。「付法血脈図記」には円修が唐・天台の第八伝法大師である広修の臨終に立ち会った旨が記されており、広修は会昌三年に死去したので、円修は生前の広修からこの付法血脈の認定を得ることができなかったと思われる。これが会昌三―承和十年中に円修が日本への帰国を決意した理由であり、円載の弟子らの帰国の便船を逃すと、いつ帰国できるかわからないという当時の事情も大きかったと推定されるところである。

「付法血脈図」には円修の弟子堅慧までが記されており、おそらく円修に同行した堅慧は唐に留まり、会昌四年にこの図証を得たものと考えられる。堅慧は空海ともつながりを有し、室生寺に住していたこともあるとされるので、円修との

表 1 安祥寺の資財形成に関係した人々

太皇太后（藤原順子）～冬嗣の女、仁明天皇の女御、文徳天皇の母 …嘉祥元年8月安祥寺創建に際して、前摂津少掾上毛野松雄の私山を購入して施入 仏具、画像、聖教、宝幢、灌頂壇具、説法具、莊嚴供養具、僧房具 山城・近江・下野・周防・阿波の寺地
田邑天皇（文徳） …仏像、画像
従1位藤原女御（古子）～冬嗣の女、文徳天皇の女御 …仏像、画像、聖教、莊嚴供養具
尚侍従3位広井女王～天武天皇の子長親王の子孫 …仏像、聖教、莊嚴供養具
大宰大貳藤原元利萬侶～式家種継の孫 …近江国志賀郡の土地 200 歩
大唐青龍寺義真阿闍梨 …仏舍利、儀軌、法具
実恵 …白銅香爐、金剛子念誦珠《恵果→空海→実恵と伝来》 ※ 秘密教伝法祖師の中に「実恵少僧都阿闍梨像壹軀」見ユ
春禎 …鍮石香爐
恵尊 …仏頂尊勝陀羅尼石塔〈唐〉
「唐人直捨施」 …庫頭具（鉄釜・竈・臼・甕など）
薬王寺の法性 …山城国宇治郡の山4町

接点を想定できない訳ではないが、円修の付法血脈に連なることができた理由は判然としない。ただ、堅慧（恵）は後に大和国に仏隆寺を創建しており、奈良県仏隆寺鐘銘（『平安遺文』金石文編二二）には「沙門堅恵、頂戴妙経」、「万里求法、無還俗憂、仙橋花頂、遇而皆遊、日唐両国、付属領収」の語句が見えるので、渡唐や天台山滞在の事実まちがいないものと思われる。

以上、恵運と同時に入唐した可能性のある者として円修・堅慧の事績を見た。円修は『日本高僧伝要文抄』第三音石山大僧都（明詮）伝に嘉祥三年二月の清涼殿における四卷金光明経講説の際に天台宗師として参加していることが知られ、「皆一時通人也」と評せられているので、天台宗の一つの流れを代表する存在と目されていたことが窺われる。とすると、円修には彼を後援する勢力があつたものと推定され、唐・天台山に自己の付法血脈相承の正統性承認を求めて渡海することもやはり何らかの後援者が介

在しないとは不可能であると思われる。そこで、今度は円修とともに入唐した恵運の人脈を探ること、彼らの渡海を支えた存在を明らかにしたい。

恵運は帰国後間もなくの嘉祥元年八月に安祥寺を創建している。安祥寺は藤原北家冬嗣の女で、仁明天皇の女御になり、文徳天皇を生んだ藤原順子の発願で、文徳天皇や女御藤原古子（冬嗣の女で、順子の姉妹）などの施入物も存する。今、『安祥寺伽藍縁起資財帳』によって安祥寺の資財形成に関連した人々を整理すると、表1のようになる<sup>17</sup>。

表1の中では日本の宗教界の関係者としてまず実恵に注目せねばならない。実恵は恵運の真言密教の師であり、表1では恵果→空海→実恵と伝来してきた由緒のある品を恵運に付託、また恵運も実恵を師と仰いでいたことがわかる。実恵は空海の同族で、讃岐国の佐伯氏出身、『続後紀』承和七年九月庚子条で少僧都になり、同八年二月戊申条では定額寺に准じて高野山に灯分を施入し、仏聖二座を供養することを申請、『三代格』卷二承和十年十一月十六日官符「応<sub>下</sub>為「国家」於「東寺」定「真言宗伝法職位」并修<sub>中</sub>結縁等灌頂<sub>上</sub>事」などにより、空海の後継者として真言宗の整備・確立に尽力していた。上掲史料05もそうした実恵の熱意を窺わせるものであり、恵運の入唐はまず実恵の真言宗隆盛の企図があったと推定されるところである。上述の円修は元来遮那業<sub>II</sub>密教を修行しており、日本の天台宗の本流からはずれた彼が恵運とともに入唐できたのは、やはり実恵によってその密教的素養を認められたためと考えられる。なお、実恵は承和十四年十一月二十三日に六十二歳で示寂しており（『僧綱補任』、03の恵運の帰国直後の出来事であったことになる）。

次に恵運の入唐中の事績としては、表1に青龍寺の義真阿闍梨との交流が知られ、これは02の「巡<sub>レ</sub>礼薦福・興善曼荼羅道場」、得<sub>レ</sub>見「青龍寺義真和尚、請<sub>レ</sub>益於秘宗」という入唐目的を果すものであり、義真の存在は承和度遣唐使から得た情報に基づくものであって、上述の円行の密教伝習不十分を補足する役割になった。その求法的一端は承和十四年六月三十日僧恵運請来目録（『平安遺文』四四五四号）に看取されるところであり、「真言経儀軌等合壹佰捌拾卷」、「右從<sub>二</sub>

表2 入唐留学僧が給付された賜金

年次	僧名	賜金額	出典
延暦14	永忠	小300両	『紀略』延暦15年5月丁未条
天長元	靈仙	100両	『入唐求法巡礼行記』卷3開成5年7月3日条
天長3	靈仙	100両	
承和11	円仁	小200両	『統後紀』承和11年7月癸未条
	円載	小200両	※『入唐求法巡礼行記』卷3会昌2年10月13日条
承和15	円載	小100両	『統後紀』承和15年6月壬辰条
寛平6	中瓊	小150両	『菅家文草』卷10「奉勅為太政官報在唐僧中瓊牒」
延喜9	中瓊	100両	『扶桑略記』延喜9年2月17日条
嘉祥3カ	円珍	30両	※右大臣（良相）から路粮として給付された金で材木を買い、国清寺止観院に三間房を造営 貞観5年11月13日円珍奏状(『平安遺文』4492号) 『参天台五臺山記』卷2熙寧5年5月14日条 なお、良房も砂金40両を賜与し、智者大師の墳塔および国清寺の仏殿の修理料に充てる

大唐「将来仏舎利梵夾真言經像壇供具物数謹録上」とまとめられるように、膨大な量とは言えないが、密教經典の充足を果している。また07によると、恵運は金十兩（以上）を持参して入唐したことが知られる。07に登場する越州良諤座主と敬文は天台山禪林寺の広修（承和度遣唐使が齎した天台宗の「難義」に対して「唐決」を呈す）の弟子で、良諤は越州開元寺の講天台座主であつたから、ともに唐の天台宗の僧である。彼らが恵運の金十兩を得て、「惡文書」を作つて天台宗を毀謗したというのはどのような行為を示すのか不明であるが、真言宗の求法を行う恵運に対して好意的に応接したことに關して、円載が意見を異にするところがあつたのであろうか。<sup>18)</sup>

06を参考にすると、恵運はまず天台山に行き、次いで越州を経て長安に向かつたと見なされ、恵運が携行した金（砂金か）は十兩以上の相当な額であつたと推定される（表2）。では、この金は誰が調達したのであろうか。恵運が独力で多額の金を持参できたとは考え難いので、やはりここには俗人の後援者を想定すべきであろう。04の朝廷への献上品もそうした後援者の存在を推定させている。恵運が渡海した承和九年の廟堂構成を『公卿補任』で見ると、



左大臣藤原緒嗣（六十九歳、翌年に死去）、右大臣源常（三十一歳）、大納言藤原愛発（五十五歳）・橘氏公（六十歳、三月四日に中納言から昇任）、中納言藤原良房（三十九歳）などの面々があり、七月十三日嵯峨太上天皇崩御に伴い勃発した承和の変では、藤原愛発は失脚、廢太子恒貞親王の東宮傳であつた源常は新皇太子道康親王（文徳天皇）の東宮傳に転身、そして藤原良房は大納言に昇任となっている。この承和の変によつて藤原良房の權勢が確立していくと言われるが、恵運の渡海はそれ以前から計画されていたものであり、その段階では良房の權力は十全ではなかつた。

『三代実録』貞觀九年十月十日条の藤原良房薨伝によると、良房の同母弟良相は「精熟真言」と評されており、良房・良相が後述の円珍の入唐求法を後援したことはまちがいないようである（表2も参照）。<sup>19</sup>しかしながら、恵運が入唐を計画した時点では彼らの權勢は確立していないので、恵運の後援者としてはやはり「深信・釈教・建立精舍」、額曰、安祥寺、資財田園割給甚多、年分度僧、修大乘道焉」（『三代実録』貞觀十三年九月二十八日条）と評される藤原順子しか想定し得ない。<sup>20</sup>承和三年五月五日付で実恵が唐の青龍寺に宛てて空海示寂を伝えた書状によると、真言宗の「外護大壇主」として「今上陛下北面后宮」に仁明天皇の女御藤原順子が挙げられており、安祥寺の創建との関係からは当然のこととも言えるが、ここに実恵と順子の人脈が交わることになる。仁明天皇も「最耽經史、講誦不倦、能練漢音、弁其清濁焉」（『続後紀』嘉祥三年三月癸卯条）と、唐文化に通曉していた様子が知られるが、仏教への関心は不明である。皇后・女御による渡海僧の派遣は次章で述べる橘嘉智子（嵯峨天皇の皇后、仁明天皇の母）の先蹤があり、嘉智子も尼寺ながら檀林寺という寺院を建立している（『文徳実録』嘉祥三年五月壬午条）。

ところで、02によると、恵運の入唐には「兼看三南岳・五臺之聖跡」というもう一つの目的があつた。上掲「請来目錄」には五臺山巡礼との關係を窺わせるものではなく、恵運の五臺山などでの足跡は不明である。但し、01・03には恵運の帰国は惠尊と行を共にしていることが知られ、表1にも安祥寺資財に対する惠尊の貢獻が窺われる。惠尊は橘嘉智子とつなが

りを有する人物で、また五臺山参詣との関係も深い。そこで、章を改めて、この惠萼の検討に進むことにしたい。

## 二 惠萼の活動

前章で整理した惠運は安祥寺を開基しており、師承関係や入唐・帰朝後の足跡をある程度辿ることができたが、惠萼は諸所に活動が散見するものの、国内での動向は殆ど不明で、日唐関の国際舞台で活躍した人物という印象が強い。まず惠萼の関係史料を整理すると、次の如くである。

### II—01 『文徳実録』嘉祥三年五月壬午条（橘嘉智子伝）

（上略）后嘗多造宝幡及繡文袈裟、窮尽妙巧。左右不知其意。後遣沙門惠萼泛海入唐、以繡袈裟奉施定聖者・僧伽和上・康僧等、以宝幡及鏡奩之具、施入五臺山寺。

### II—02 『元亨釈書』卷十六

釈慧萼、齐衡初、応橘太后詔、齎幣入唐、著登萊界、抵雁門上五臺。漸届杭州塩県靈池寺、謁齐安禅師、通橘后之聘、得義空長老而帰。又入支那、重登五臺、適於臺嶺感観世音像。遂以大中十二年《天安二》抱像道四明、归本郷。船過補陀之海滨、附着石上、不得進。舟人思載物重、屢上諸物、船着如元。及像出、船能泛。萼度像止此地、不忍弃去、哀慕而留、結廬海嶠、以奉像、漸成宝坊、号補陀落山寺。今為禅刹之名藍。以萼為開山祖云。

### II—03 『元亨釈書』卷六

釈義空、唐國人。事塩官齊安國師、室中推爲上首。初、尊法師跨海覓法。吾皇太后橘氏、欽唐地之禪化、委金幣於尊、相聘有道尊宿。尊到杭州靈池院、參于國師、且通太后之幣。國師感嗟納之。尊曰、我國信根純然、教法甚盛、然最上禪宗未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>伝也。願得師之一枝佛法、爲吾土宗門之根柢、不亦宜乎。國師令空充其請。空便共尊泛海著大宰府。尊先馳奏。勅迎空館于京師東寺之西院。皇帝寶錫甚渥、太后創檀林寺居焉。時時問道、官僚得指受者多。中散大夫藤公兄弟其選也。尊再入支那、乞蘇州開元寺沙門契元勒事、刻琬琰一題曰「日本國首伝禪宗記」。附舶寄來。故老伝曰、碑峙于羅城門側。門楹之倒也、碑文又碎。見今在東寺講堂東南之隅。

II—04 『宋學士文集』卷三十八「贈令儀藏主序」(『四部叢刊』集部)

(上略)達磨氏自身毒西來既至中夏、復示幻化、持集履西歸。後八十六當推古女王之世、達磨復示化至其國。世子豐聰過和之片岡、達磨身爲餒者、因臥道左。世子察其異、解衣衣之、已而入寂遂藏焉、及啓棺無所<sub>レ</sub>有、唯賜衣存事、与隻履西歸、絶類所異者。當時無人嗣其禪宗、爾、自時厥後、橘妃遣慧尊致金繪泛海、來請齊安國師、卒令義空比丘入東、其首伝禪宗之碑信不誣矣。(下略)

II—05 『籌海図編』卷二「倭奴朝貢事略」(承和八〇八四一)

会昌元年入貢(遣僧貢物入唐、礼五臺仏法)。

II—06 『入唐求法巡礼行記』卷三会昌元年(承和八〇八四一)九月七日程

聞、日本僧惠尊、弟子三人到五台山。其師主發願、爲求十方僧供、却歸本国、留弟子僧二人、令住台山。

II—07 『入唐求法巡礼行記』卷三会昌二年(承和九〇八四二)五月二十五日程

〔上略〕楚州新羅詠語劉慎言の書狀〕惠萼和尚附船到楚州、已巡五台山、今春擬返故郷。慎言已排比人船詠。其萼和尚去秋暫住天台。冬中得書云、擬趁李隣德四郎船取明州帰国。縁萼和尚錢物・衣服并弟子悉在楚州、又人船已備、不免奉邀、從此發送。〔下略〕

Ⅱ—08 『白氏文集』卷十一題記（金沢文庫旧蔵）<sup>22</sup>

大唐具都蘇州南禅院日本国裏頭僧（惠萼自写）文集、時會昌四年三月十四日、日本承和十一年也。〔下略〕

Ⅱ—09 『入唐求法巡礼行記』卷四會昌五年（承和十二）八四五 七月五日条<sup>23</sup>

〔上略〕又日本国惠萼闍梨・弟子、會昌二年礼五台、為求五台供、就李隣德船却帰本国去。年々將供新到来。今遇国難還俗、見在楚（蘇カ）州云々。〔下略〕

Ⅱ—10 『続日本後紀』承和十四年七月辛未条（Ⅰ—03に同じ）

天台留学僧円載謙從仁好及僧惠萼等至自大唐、上奏円載之表状。唐人張友信等冊七人同乘而来着。

Ⅱ—11 『高野雜筆集』下所収「唐人書簡」<sup>24</sup>（嘉祥二）八四九

萼闍梨至枉手字、兼惠方物。大海間闊、如是留意、不忘細微、寄以方物。若非吾人情至、曷於是捧授。不勝悚佩。吾人在彼、雖是異域、行於大法。利物為心、沾濡品類、彼此豈殊。況承国恩、渥澤稠疊、亦人間盛事也。勉之、云叙以大教淪替、曾為所驅、慙顔被縫腋之衣、未路阻望烟之食。尋遇王臣外護、塔寺爰興、禅林重賜、掄材朽質、蒙狀入籍。微願既逼、永固可修。鄙情不勝慶幸、今蒙衆令勾當造寺、道力輕微、庶事荒淺。且竭蹇鈍、敢有怠息。无物可表微誠。白角如意謹寄上。望垂檢納、幸甚。廻使還状、不宣。僧雲叙状上。大中三年六月七日。空禅兄国大德（侍者）。〔下略〕

Ⅱ—12 「唐人書簡」<sup>⑧</sup> 大中三年か

哀叙。謹具短封。仲夏毒熱。伏惟和尚道體萬福。即日、度、晨昏外蒙恩。尊和尚至伏蒙恩念、不忘遠賜存問、并惠及名席。拜受慙荷、下情難勝。不審近日寢膳何如、伏計不失調護。限以山海阻隔、每恩頂礼无因、但積瞻仰之極。謹因尊和尚廻、附狀起居。不次、謹狀。五月廿七日 趙度狀上。空和尚《法前》。(下略)

## II—13 「唐人書簡」⑩ 大中三年か

尊闍梨到蒙書問、具知彼德趣平善深。當喜荷。伏以闍梨紹隆三寶、遠涉滄溟、伝西土佛心、印東土心佛。法延流注、導最上乘。開闡玄閑、投機而設語、上者不離凡而果聖、亦不与具語、下者不存聖而捨凡、亦不申立。不止不下者覺智永忙、對敵者一擊而矣。是上人之德。漕溪玄旨、囑在應機、衆會住持、當効先德。每開、彼国々王太后崇敬佛法、善名流注於他邦、人第有緣、衆皆賀喜。常聞、菩薩所作化人、大悲无倦。本国佛法、聖主今已再興、置寺度僧、倍加嚴峻。雖則癘興今運、法滿等亦且常耳。禪宗長老每以欽風。若非有力者、焉以弘持大教。謹書丹款、以代鄙情。時候是常、故不煩述。謹因尊闍梨廻信、附狀奉申。不宣、法滿狀上。空闍梨《侍者》。(下略)

## II—14 「唐人書簡」⑬ (仁寿三〇八五二)

不頂謁来、累經數歲。自余弟廻日、忽奉芳音、頓解思心、无為所喻。仲夏炎毒、伏惟法體安和。即此弟子、塵俗之類、是事相纏。自往年舍弟隨尊禪東行、達於彼国、每蒙恩照、眷念之深、愧佩在心、未能陳謝。又兒子胡婆、自小童来、心常好道、阻於大唐、佛法裏否、遂慕興邦。伏惟和尚不棄癡愚、特賜驅使。此之度脱、无喻可陳。幸垂日月之明、廻照心腑、溟漠所阻、頂拜來問。恩義之誠、每增馳系。今因舍弟往奏狀。不宣、謹狀。大中六年五月廿二日蘇州衙前散將徐公直狀上。義空和尚《法前》。(下略)

II—15 「唐人書簡」 ⑮ 某年（參考）

孟冬薄寒。伏惟和尚法體萬福。即此公祐在客之下、諸弊可悉。前月中京使至、竟謝垂情、特賜札示。悚  
 愧無極。子姪愚昧、在京深蒙和尚賜教、甚困心力。反々側々。公祐今度所將些子貨物來。特為  
 愚子姪在此、欲得看集一轉。伏望和尚慈流發遣、暫到鎮西府相見了、却令入京、侍奉和尚、伏惟照察。  
 謹因惠闍梨廻奉狀。不宣。俗弟子徐公祐和南。十月廿一日。義空和尚（法前）。（下略）

II—16 「入唐五家伝記」所收「頭陀親王入唐略記」

（上略）《貞觀三年》十月七日仰唐通事張友信令造船一隻。四年五月造船已了。時到鴻臚館、七月中旬、率  
 宗叡和尚・賢真・惠萼・忠全・安展・禪念・惠池・善寂・原懿・猷繼并船頭高丘真岑等及控者十五人（此等竝伊勢  
 氏人也）、舵師絃張友信・金文習・任仲元（三人竝唐人）・建部福成・大鳥智丸（二人竝此間人）、水手等、僧俗合六  
 十人、駕船離鴻臚館、赴遠值嘉島。（中略）《貞觀五年》十二月、親王・宗叡和尚・智聰・安展・禪念及興房・  
 任仲元・仕丁丈部秋丸等、駕江船牽索、傍水入京。但賢真・惠萼・忠全并小師・弓手・舵師・水手等、此年四月  
 自明州、令歸本國畢。（下略）

II—17 「安祥寺伽藍縁起資財帳」（『平安遺文』一六四号）

佛頂尊勝陀羅尼石塔一基（唐）。惠萼大法師所建。

惠萼は何度か彼我を往来したようであり、今、私案の理解と依拠史料を呈示すると、次のようになる。<sup>25</sup>

① 承和八年（八四一＝会昌元）…史料05・06・07、（01・02）（在唐新羅人の帰国船）

↓ 承和九年（八四二＝会昌二） 帰国…史料09 [李隣徳の船]

② 承和十一年（八四四＝会昌四）…史料08・09

※会昌の廃仏で一時還俗

↓承和十四年（八四七〃大中元） 帰国…史料10、I—01〔張友信の船〕

唐僧義空の来日…史料14

↓齊衡三年（八五六〃大中十） 頃に唐に帰国か

③嘉祥二年（八四九〃大中二）…史料11・12・13 \*徐公祐の来日

↓? 帰国…（史料15か）

④齊衡元年（八五四〃大中八） または三年（八五六〃大中十） 頃…史料02か

↓天安二年（八五八〃大中十二） 帰国…史料02

⑤貞觀四年（八六二〃感通三）…史料16（真如に随行）〔張友信の船〕

↓貞觀五年（八六三〃感通四）…史料16

これらのうち、④の渡海年次に関しては、史料01の嘉祥三年五月には橘嘉智子が崩じているので、02の「齊衡初」には紀年の誤りがあると思われる。橘嘉智子の指示による五臺山訪問は①または②を指すものと推定され、②では03に記された唐僧義空の招聘なども実現している。但し、02で述べられている帰国年次については正しいものとする、やはり④の齊衡元年の渡海はあったものと考えられ、あるいはこれは齊衡三年頃に比定されている唐僧義空の唐への帰国に随伴したもので、「元」と「三」の字形の相似により、渡海年次は齊衡三年に訂正すべきものであるかもしれない。<sup>(26)</sup> ちなみに、『文徳実録』齊衡二年七月丙寅条には「大宰府伝『進入唐留学僧円載上表。』」とあり、この頃に唐から便船が到来したことが知られるので、惠萼はその帰唐に随伴して渡海した可能性が考えられる。とすると、惠萼は史料に知られる限りでも五度も日唐間を往来した人物ということになる。

では、惠萼はどのような契機・目的で彼我を往来したのであろうか。またこのような頻繁な往来が可能になったのは何故であろうか。惠萼は日本の宗教界での位置づけは不明で、宗派や師承関係も不詳とせねばならない。<sup>(27)</sup> 僅かに史料02に観音信仰、03に禪宗との関係が窺われるが、観音信仰の方は唐宋商人など渡海交易に従事する海商の信仰とのつながりによるものと考えられ、<sup>(28)</sup> 惠萼自身の本当の信仰の所在はよくわからない。但し、①・②ではいずれも五臺山に参詣しており、五臺山信仰との関係が窺われるところである。

惠萼①の渡海は承和度遣唐使が帰路に雇用した新羅船の船頭である在唐新羅人の唐への帰還に伴うものと推定されている。<sup>(29)</sup> 『続後紀』承和七年九月丁亥条「大宰府言、対馬島司言、遙海之事、風波危險、年中貢調・四度公文、屢逢漂没」。伝聞、新羅船能凌波行。望請、新羅船六隻之中、分給一隻。聴之。』、『三代格』卷五承和七年九月二十三日太政官奏の「又遣唐廻使所乗之新羅船、授於府衙令伝彼様。是尤主船之所掌者也。」などによると、新羅船への技術的信頼が窺われる。また『入唐巡礼行記』卷一開成四年（八三九）承和六三月十七日条「押領本国水手之外、更雇新羅人詣海路者六十余人」などから考えて、新羅人の航海技術への信任は高かったと思われる（卷一開成四年四月一〜五日条も参照）。

史料07下略部分には「僧玄濟持金廿四小両、兼有三人々書状等、付於陶十二郎歸唐。此物見在劉慎言宅。」とあり、新羅人船頭の陶十二郎なる者が日本から帰唐し、楚州の劉慎言に四仁宛の砂金や人々の手紙を付託したとある。劉慎言は承和度遣唐使の新羅訳語の一人を務めており（卷一開成四年三月二十二日条に初見）、その後楚州に戻ったらしく、円仁が入唐求法を終えて帰国する時も楚州惣管の地位にあった（卷四大中元年（八四七）承和十四六月九日条）。したがって惠萼①の渡海は、こうした在唐新羅人による彼我往還の交通網に依存して実現したものと見ることができよう。

次に惠萼の渡海が可能になった国内的状況を考えると、惠萼には信仰面での入唐求法希望の様子は看取できないので、



その渡海には何者かの指示、やはり史料01・02に記された橘嘉智子とのつながりが重視されねばならない。大中十二年（八五八）天安二（五月十五日）円珍入唐求法目録（『平安遺文』四四八〇・八一号）には、「本国僧田円覚、唐開成五年過來、久住五臺、後遊長安、大中九年城中相見」とあり、開成五年（八四〇）承和七）は史料05から窺われる恵萼①の渡海年次と若干のずれがあるが、この田円覚＝田口円覚は橘嘉智子の母田口氏（史料01上略部分）の縁者と推定され、ここに恵萼の渡海と橘嘉智子との関係が想定される。

では、この最初の渡海時に彼らはどのようにして五臺山の存在を知ったのであろうか。上述のように、恵萼と五臺山信仰の關係は彼の渡海理由の唯一の確実な部分であるから、五臺山信仰の日本への到来について検討してみたい。まず承和度遣唐使の請益僧円仁の五臺山行きの過程を見ると、円仁がこれ以前に五臺山の存在を知っていた様子は看取できない。即ち、円仁は当初の目的であつた天台山行きをあくまで熱望するが、行動の起点となる登州文登県赤山村からは五臺山・長安の方が近いことを知らされ、五臺山での求法に向かう。『入唐求法巡礼行記』卷二開成四年七月二十三日条には、「（上略）三僧（円仁と弟子の惟正・惟曉のこと）為向天台、忘歸国之意、留在赤山院。每問行李、向南去、道路絶遠。聞導、向北巡礼有五臺山、去此二十余里、計南遠北近。又聞、有天台和尚法号志遠・文鑑座主、兼天台玄素座主之弟子、今在五臺山修法花三昧、伝天台教迹。北臺在宋谷蘭若、先修法花三昧、得道。近代有進禪師、楚州龍興寺僧也、持涅槃經一千部入臺山、志遠禪師迎受、法花三昧、入道場求普賢、在院行道、得見大聖。如今廿年也。依新羅僧聖林和尚口説記之。此僧入五臺及長安遊行、得廿年、来此山院。語話之次、常聞臺山聖跡、甚有奇特。深喜近於聖境、暫休向天台之議、更發入五臺之意。仍改先意、便擬山院過冬、到春遊行巡礼臺山。」とあり、円仁は五臺山での天台宗求法の可能性と五臺山の聖境・聖跡なるを認識して、五臺山行きを決めたという。この情報を円仁に教えたのは新羅僧聖林であり、彼の五臺山・長安での求法を参考に、円仁

の方針転換が図られた訳であつた。九月一日条にはまた、新羅僧諒賢に五臺山までの行程を確認しており、九月二十六日付で五臺山行きの公驗発給を申請することになる。

五臺山は西晋の末頃、神仙道の者によつて開かれ（酈道元『水経注』によると、永嘉三年（三〇九）と見える）、北魏代には「山紫府」、「仙者の都」と称されていたが、華嚴經に登場する清凉山と結びつけられ、唐・高宗の儀鳳元年（六七六）には北印度罽賓国の仏陀波利が五臺山を文殊菩薩の靈場と聞いて訪問するなど、仏教の聖地になっていた。特に則天武后は文殊信仰に篤く、六朝以来の大字靈鷲寺を大華嚴寺と改称し、五臺山の位置づけが確立していくとされる<sup>31</sup>。円仁は『入唐求法巡礼行記』巻二開成五年三月五日条の三月三日付書状で、「遠聞、中華五臺等諸処、仏法之根源、大聖之化処、西天高僧踰險遠投唐国名德遊茲得道。円仁等旧有欽羨、涉海訪尋、未遂宿願。」と述べているが、これは赤山法華院での知聞をふまえたもので、上述の経緯を見ると、円仁には事前に五臺山の知識はなかったと思われる。ところが、円仁が五臺山に到着すると、靈仙なる日本人僧の足跡が残されており、円仁はその波乱に富んだ生涯を記録することになる（巻二開成五年四月二十八日条、巻三同年五月十七日条、七月一・三日条など）。

十一世紀末に聖地巡礼のため渡宋を求めた成尋は、「日域靈仙、入清凉山而見二万菩薩」（『朝野群載』巻二十延久二年（一〇七〇）正月十一日僧成尋請渡宋申文）と、靈仙を五臺山巡礼の先駆者と位置づけている。『宋史』日本国伝には「次白壁天皇、二十四年、遣二僧靈仙・行賀、入唐、礼五臺山学仏法」とあり、靈仙の入唐年次については光仁天皇の宝龜四年説と桓武天皇の延暦二十四年説が存する。靈仙は興福寺僧で、宝龜四年入唐とすれば、永忠（三論宗）などと同じく、渤海使壹万福らの帰国に随伴して渤海路で渡海したことになり、その後の渤海經由での書状到来とも符合するが（『類聚国史』巻百九十四天長三年三月戊辰朔条・五月辛巳条、『続後紀』承和九年三月辛丑条・四月丙子条）、これは靈仙が五臺山で知己になった渤海僧貞素との関係による伝達経路であつた（『入唐求法巡礼行記』巻三開成五年七月

三日条所引「哭日本国内供奉大德靈仙和尚詩并序」。靈仙は興福寺慈蘊撰『法相髓腦』跋文に「以上文、延暦廿二年付遣唐学生靈船闇梨渡於大唐」とあるように、やはり延暦度の留学僧であつたと見るのがよいと思われる。

靈仙は般若三藏を中心とする当時の訳経事業に参加したことで著名であるが、元和十五年（八二〇）弘仁十二年には五臺山に到り、太和二年（八二八）天長五）以前に毒殺されたことが知られる（上掲『入唐求法巡礼行記』の各条）。靈仙は遣唐留学僧であつたから、『続後紀』承和九年四月丙子条に「前年聘唐使人却廻、詳知苾芻靈仙化去」とあるように、その死去の事實は承和度遣唐使が朝廷に報告していた。但し、円仁が五臺山に到つて初めて靈仙の存在を認識したと思しきように、靈仙の消息や五臺山の情報が広く仏教界、あるいは一般に公開されていたとは考え難い。

しかしながら、I—02によると、恵運は五臺山巡礼を入唐の目的の一つに掲げており、五臺山の情報を知る者もいたことが窺われる。前章で触れたように、恵運は大宰府周辺の来日新羅人と交流があり、彼らを通じて赤山法華院經由の五臺山情報を得ていたのかもしれない。但し、恵運の渡海が藤原順子の支援によるところが大であるとすれば、その方面の五臺山巡礼希求は如何であろうか。『参天台五臺山記』卷五熙寧五年（一〇七二）延久四）十二月一日条によると、成尋は後冷泉天皇の皇后であつた皇太后四条宮寛子に託された御書經と太皇太后宮（後冷泉天皇の中宮で、後一条天皇の女章子内親王）の鏡・髪などを五臺山に奉納しており、則天武后の文殊信仰の影響を受けてか、五臺山への崇敬は女性の方が強かつたと見受けられる。則天武后の事績は奈良時代の光明皇后や孝謙・称徳女帝には皇后・女性君主の手本として重視されて<sup>(33)</sup>おり、その後も為政者としての皇后・女帝の唯一の規範であつたから、恵運と関係の深い橘嘉智子や仁明天皇の女御藤原順子なども同様に私淑していたのではないかと推定されるところである。<sup>(34)</sup>

史料01によると、嵯峨天皇の皇后で檀林寺を創建したので檀林皇后とも称された橘嘉智子は、五臺山への奉納品を恵尊に託したとあり、これは①・②の恵尊の五臺山行きを規定する派遣動機になつたと思われる。靈仙の情報が朝廷に齎され

表 3 9 世紀代の唐人の来航例

年次	主な出典	出身・ 出発地	人名	備考
弘仁 10・6・16	紀略	越州	周光翰・言升則	新羅人船で来着
弘仁 10	入唐求法巡礼行記 開成 4・1・8条	揚州	張覓濟	新羅人らと出羽国に漂着
弘仁 11・1・22	紀略	越州	周光翰・言升則	渤海使に随伴して帰国
弘仁 11・4・27	紀略		李少貞ら 20 人	出羽国に漂着*李少貞は『続後紀』承和 9・正・乙巳条によると、もと張宝高の臣で、この時には新羅武州列賀間丈の牒を奏して来日
承和 1・3・16	続後紀		張繼明	大宰府に滞在中→入京
承和 5	文徳実録 仁寿 2・12・22条		沈道古	大宰府鴻臚館に滞在し、小野篁と詩賦を唱和
承和 5 ～ 11	文徳実録 仁寿 1・9・26条			大宰府少式藤原武守が「大唐人貨物」を檢校
承和 8	入唐求法巡礼行記 会昌 2・5・25条		新羅人船頭 陶十二郎	惠萼がその帰唐に随伴して入唐
承和 9・5・5	平安遺文164		李処人	惠運の入唐、I - 02
承和 9・5	入唐求法巡礼行記 会昌 2・5・25条 会昌 5・7・1条	明州	李隣徳	惠萼が帰国
承和 10・12・9	続後紀		新羅人張公靖ら 26 人	円載の弟子仁好・順昌が長門国に帰着
承和 14・7・8	続後紀	明州	張友信ら 47 人 元静	惠萼・惠運の帰国 I - 01・02・03

承和 14・10・2	続後紀	蘇州	唐人江長・新羅人金子白・欽良暉・金珍	円仁の帰国ともに来日 42 人、『入唐求法巡礼行記』大中元・6・9、10・19 条では 44 人
嘉祥 2・8・4	続後紀		大唐商人 53 人	大宰府に到着
嘉祥 2・⑫・24	高野雜筆集付収 [唐人書簡]	蘇州	徐公祐	在日中の唐僧義空に贈物、大中年間に何度か来航
嘉祥 2	三代実録 元慶1・6・9条		崔勝	帰化
仁寿 2・2	平安遺文4492		張友信	唐に帰る
仁寿 3・7・15	平安遺文102～110		王超・李延孝	円珍の入唐 * 王超は平安遺文 124 に新羅商人とある
仁寿 3・12	平安遺文103～109		李延孝	円珍の従者の帰朝
斉衡 2・7・20	文徳実録			大宰府から円載の上表を伝進～唐から来航か
斉衡 3・3・9	平安遺文124～127	越州	詹景全・劉仕献・李延孝・李英覚	日本より帰国し、在唐の円珍に会う * 李延孝・李英覚は渤海商人とある
天安 2・6・8	平安遺文4492		李延孝・高奉・蔡輔・李達・詹景全	円珍の帰朝
貞観 3・8・9	人唐五家伝	明州	李延孝	大宰府鴻臚北館に滞在
貞観 4・7	人唐五家伝		張友信・金文晋・任仲元	真如らの渡海
貞観 4・7・23	三代実録		李延孝ら 43 人	大宰府に到着
貞観 5・1・4	平安遺文4539		陳泰信	大宰府に滞在中
貞観 5・4	人唐五家伝		詹景全・徐公直	真如の従者の帰朝
5・8・4	平安遺文4541・42 448～90		李達	徐公直は公祐の兄

貞観 6	平安遺文4541・42		詹景全	来日
貞観 7・7・27	三代実録 人唐五家伝		李延孝ら 63 人 任仲元	大宰府に安置・供給真如の天竺出発を報告
貞観 7	平安遺文4541・42		詹景全	来日
貞観 8・5・21	三代実録		任仲元	過所なしで入京企図
貞観 8・10・3	三代実録		張言ら 41 人	大宰府で安置・供給
貞観 8	三代実録 元慶8・3・26	明州	李延孝	宗叡の帰朝
貞観 9	寺門伝記補録	蘇州	詹景全	円珍の依頼品を将来
貞観 16・7・18	三代実録		崔岌ら 36 人	大宰府に安置・供給
貞観 18・8・3	三代実録		楊清ら 31 人	大宰府に安置・供給
元慶 1・8・22	三代実録	台州	崔鐸ら 63 人	大宰府に安置・供給
元慶 1・12・21	三代実録		駱漢中	智聡の帰朝
元慶 1	平安遺文4541・42		李延孝・詹景全	円載・智聡の帰朝、円載とともに溺死
元慶 5	平安遺文4541・42	蘇州	李達・張蒙	円珍の依頼品将来
元慶 6・7・15	平安遺文4541・42	蘇州	李達	円珍の書状を託され帰国
元慶 7	円珍伝		相志貞	大宰府に到来し、国清寺諸僧らから円珍宛の書信を齎す
仁和 1・10・20	三代実録		大唐商人	大宰府に来着→王臣家使の私交易を禁止
仁和 2・6・7	平安遺文4548	揚州		円珍に写経 50 巻を送り、返礼の砂金を与えられる
寛平 5・3	菅家文草巻9・10		王内	在唐僧中璵の書状を届ける
寛平 8・3・4	紀略		梨懷 (李璵)	入京させる

たのは天長三年のことで、『類聚国史』卷七十八天長三年二月壬戌条「賜唐留学僧靈船之弟妹、阿波国稻一千束。」とあるのは、朝廷で彼の事績を評価してのことと考えられ、同時に五臺山の存在もクローズアップされたものではあるまいか。また大同元年十月二十二日僧空海請来目錄（『平安遺文』四三二七号）には文殊師利菩薩を冠する經典がいくつかあり、<sup>(35)</sup>文殊菩薩の本山たる五臺山の情報とそれに対する関心が改めて喚起された可能性も考慮しておきたい。

ところで、史料03によると、惠萼は①の帰路に李隣徳の船を利用しており、<sup>(36)</sup>②の帰路には張友信の船と、在唐新羅人や渤海人を含む唐商人の来航船に依存して彼我往来を実現している。承和九年の惠萼①の帰国とは別に、I—02によると、同年惠運は李処人なる者の船で入唐しているので、正史には残らない複数の唐商人が大宰府に来航していたことが窺われる。そこで、次に惠萼らの渡海、日本への帰還を支えた唐商人との関係を検討してみたい。

九世紀の唐商人来航の様子は表3の如くである。八世紀後半には安史の乱による唐の混乱、対唐関係の安定、また自国の手工業生産の発展と中継貿易の展開を背景とした新羅の国際交易活動が盛んになっていた。<sup>(37)</sup>こうした新羅人の海上活動が最高潮に達するのが天長五年の張宝高の清海鎮大使就任であり（杜牧『樊川文集』卷三「張保臯鄭年伝」、張宝高はこれ以前から日本との交易にも従事していたようであるが（『入唐求法巡礼行記』卷四会昌五年九月二十二日条）、朝鮮半島西南部の清海鎮を拠点に、航行する唐船や新羅船の貿易活動を保障するとともに、その代償に財貨を得て、また自らも配下の人々を組織して唐—新羅—日本を結ぶ交易網を構築している。張宝高の安定した制海権は承和八年十一月の彼の死去（『続後紀』承和九年正月乙巳条）の時点（新羅王権と対立して反乱）<sup>(38)</sup>まで維持されていた。

表3によると、唐人は当初新羅人の船で日本に到来しており、中には弘仁元年の李少貞のように、当時は張宝高の配下にあつて、新羅人たることが明瞭な者（『続後紀』承和九年正月乙巳条を参照）が「唐人」として来航する場合も含まれている。これは張宝高の死後、在唐新羅人が唐から来航する点では「唐人」に他ならず、日本側の新羅商人の鴻臚館安置

停止（『三代格』卷十八承和九年八月十五日官符、後掲史料<sup>h</sup>）の法網を免れて、唐人としての処遇を得るという便法を生み出す先駆形態になる。<sup>39</sup> 承和度遣唐使派遣の時点でも大宰府には張継明や沈道古のような唐人が滞在していたが、彼らの来航方法は不明であり、今のところ唐人が主体になって日本に来航したことが判明するのは、承和九年恵運渡海時の李処人や承和十四年恵運帰国時の張友信などが早い事例と位置づけられる。<sup>40</sup> したがって恵萼①の渡海時点では承和度遣唐使が帰路に雇用した新羅船の船頭の帰唐に随伴して入唐する方法しかなかったのである。

しかしながら、この恵萼①の渡海と帰朝の間にちょうど張宝高の死去があり、恵萼①・恵運の帰朝時からは唐人（含、在唐新羅人・渤海人）の日本来航を利用せざるを得なくなった。否、唐商人は日本人の彼我往来を名目に日本への通交ルートを確保していったと見ることできよう。恵萼②の入唐では恵萼は杭州塩官県靈池寺の齊安禪師と面識を得て、その高弟義空を随伴して帰朝している（02・03）。この時に婺州衙前散將徐公直の子胡婆が義空に随従して来日しており、公直は地方官の肩書を有する在地有力者で、その弟公祐が対日交易に従事するという形であった。<sup>41</sup> 徐公祐は表3にも散見しており、来日時には甥である胡婆や義空と連絡を交わし、徐公直の書簡を届けたりしている（14、「唐人書簡」①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧）。恵萼③の入唐時には義空の関係者への書簡の授受が知られ、またこの頃に徐公祐が来日していたことがわかるので、この③の渡海は徐公祐との関係で実現したものであり、義空と唐との連絡を仲介するという目的が含まれていたのかもしれない。14によると、徐公直も恵萼の存在を認識しているから、恵萼は義空を支援する徐氏の人々とつながりを得ることができたのであろう。これは橘嘉智子の死後にも恵萼が彼我往来を続け得た背景の一つである。

恵萼④の渡海は義空の帰唐に随伴するものと推定され、これら②・④の彼我往来では恵萼は義空周辺の人々や徐公直・公祐らとの人脈を充分に利用できたと思われる。このように特定の唐人との関係維持、彼我の連絡網形成は後述の円珍にも窺われるところであり（表3）、円珍は入唐求法からの帰朝後も唐僧と書簡を交わし、また唐商人を通じて經典入手を



企図する関係を維持している<sup>(12)</sup>。そうした人脈形成の方法の先駆者として惠萼の活動は重要であつたと言えよう。なお、義空が日本への滞留を切り上げて、唐に戻つた理由としては、惠萼<sup>③</sup>の帰朝時に齎された唐からの書簡に会昌の廢仏以後の唐の仏教界の復興が伝えられたこと(11・13)、この時点では日本では禪宗を受容する段階になつたことなどが考えられる<sup>(13)</sup>。

このような唐商人(俗人)の来日に対して、日本側は惠萼や惠運などの僧侶だけが渡海していたのであるうか。日本側の俗人の動向は如何であつたのか。この点に関しては惠萼<sup>②</sup>・惠運の帰朝時の様子を伝える史料Ⅰ—01に日本側の俗人の渡海が記されている。惠萼・惠運が利用したのは張友信の船で、この船は承和度遣唐使の天台請益僧で、その後唐に滞留して在唐新羅人の助力などで求法を続けた円仁も帰国に利用しようとしていたものであるが、日本人の春太郎・神一郎という者が銭金を支払い、彼らおよび惠萼・惠運の帰朝に使用されることになつたという(Ⅰ—03・Ⅱ—10も参照)。惠萼<sup>①</sup>の渡海には弟子僧二人が随行してゐたことが知られるが(07)、今回は惠萼も惠運も在唐中であつたから、この日本人の俗人の渡海に関しては、『入唐求法巡礼行記』卷四会昌六年(八四六)承和十三(三月九日条に「得大使書云、近得南来船上人報云、日本国来人、僧一人・俗四人、見到揚州、将本国書・信物等」、専来訪「覺請益僧云々」とある、楚州李隣德(惠萼が<sup>①</sup>の帰朝時に利用したことのある人物)船に乗つて到来した円仁の弟子性海(卷四会昌六年正月九日、四月二十七日、五月一日、十月二日条も参照)との関係が推測される。

a 『三代実録』貞観十六年六月十七日条

遣伊予權掾正六位上大神宿禰己井・豊後介正六位下多治真人安江等於唐家市香菓。

b 『朝野群載』卷一「捻持寺鐘銘」

(上略)多以黄金、附入唐使大神御井買得白檀香木、造千手觀世音菩薩像一鉢。仍建衢場於摂津国島下郡。

安「置此像」、号曰「捻持寺」。(下略)

c 『三代実録』元慶元年八月二十二日条

先<sub>レ</sub>是、大宰府言、去七月廿五日、大唐商人崔鐸等六十三人駕<sub>二</sub>一隻船<sub>一</sub>、来<sub>二</sub>着管筑前国<sub>一</sub>。問<sub>二</sub>其来由<sub>一</sub>、崔鐸言、從<sub>二</sub>大唐台州<sub>一</sub>載<sub>二</sub>貴国使多安江等<sub>一</sub>、頗齎<sub>二</sub>貨物<sub>一</sub>、六月一日解<sub>レ</sub>纜、今日投<sub>二</sub>聖岸<sub>一</sub>。是日、勅<sub>二</sub>宣依<sub>一</sub>例安置供給。

d 『三代実録』元慶元年六月二十五日条

渤海国使楊中遠等、自<sub>二</sub>出雲国<sub>一</sub>還<sub>二</sub>於本蕃<sub>一</sub>。王啓并信物不<sub>レ</sub>受而還<sub>レ</sub>之。大使中遠欲<sub>二</sub>以<sub>二</sub>珍翫玳瑁盃等<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>献天子<sub>一</sub>、皆不<sub>レ</sub>受之。通事園池正春日朝臣宅成言、昔住<sub>二</sub>大唐<sub>一</sub>多觀<sub>二</sub>珍宝<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>若<sub>レ</sub>此奇恠<sub>一</sub>。(下略)

e 『平安遺文』四六三九号陳泰信書狀(園城寺文書) 貞觀五年<sup>44)</sup>か

孟春猶寒、惟□(大)德道體動止康和。即日〈泰信〉蒙<sub>レ</sub>恩、不審近日道體何似。伏許不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>葆重<sub>一</sub>。〈自泰信〉從(從カ)台州四月一日得<sub>二</sub>疾病<sub>一</sub>、直到<sub>二</sub>本国<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>上<sub>二</sub>鴻臚館<sub>一</sub>、更疾病因重、至<sub>二</sub>九月末間<sub>一</sub>、些々可<sub>レ</sub>瘥、賴得<sub>二</sub>拾<sub>二</sub>活命<sub>一</sub>。今間從<sub>二</sub>京中<sub>一</sub>朝使来、收<sub>二</sub>買唐物<sub>一</sub>。承蒙<sub>二</sub>大德消息<sub>一</sub>、伏知<sub>二</sub>大德慶化<sub>一</sub>、〈泰信〉不<sub>レ</sub>勝<sub>二</sub>喜慶之至<sub>一</sub>。伏惟珍々重々。幸逢<sub>二</sub>播州少目春太郎廻次<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>狀起居<sub>一</sub>。不宣。陳〈泰信〉再拜。正月四日。大德(座前／謹空)。

f 『紀略』延暦十一年五月甲子条(参考)

唐女李自然授從五位下。自然、從五位下大春日淨足之妻也。入<sub>レ</sub>唐娶<sub>二</sub>自然<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>妻、歸朝之日、相隨而来。

ここに登場する春太郎は春日宅成、神一郎は神直己(御)井に比定される<sup>45)</sup>。神一郎は大神朝臣氏の傍系氏族に属する者であつたが、『文德実録』斉衡元年十月癸酉条で侍医神直虎主らとともに大神朝臣に改姓し、大神己(御)井として活躍することになる。彼はこの改姓時に少初位下であり、官人身分としては最下級に属していた。虎主は承和度遣唐使の医師で、「神参軍」と記される人物に比定できるから(『入唐求法巡礼行記』卷一開成四年四月八日条)、史料I—01に關係す

る神一郎の承和十二年末・十三年初頃の渡海はこうした同族の入唐経験者の存在とそのつてによって可能になったと推定される。そして、a・bによると、後年になって、時に伊予権掾正六位上で香藥購入のための入唐使に起用され、唐に渡ったことがわかる。その帰国はcで、今回は三年間程唐に滞在して、唐商人の便船で帰朝しており、唐商人との人脈を維持しながら、複数回の彼我往来を行っているのである。

春太郎は『三代実録』貞観元年二月九日条（大初位下）、同三年正月二十八日条（播磨少目大初位上）、同十四年正月六日条（園池正六位上）、元慶元年二月三日条（同上）と、四度に亘り渤海通事に起用されたことが知られ、渤海通事は中国語で通訳したと考えられているので、中国語に堪能な人物であつたことが窺われる。またdによると、かつて唐に行き、多くの珍宝を観覧したといい、唐物に対する鑑識眼にも長けていたようである。彼は貞観三年の時点で播磨少目であつたが、貞観五年に比定されるeでは、この時に唐物使として大宰府に派遣され、唐物の収買にあたっており、これはそうした能力を評価されていたことを裏付ける材料になる。史料I-101によると、春太郎は当初唐人江長らの船に乗ることを約束していたが、彼が広州に出かけて交易に従事している間に、神一郎が張友信の船を調達してしまったので、張友信の船で帰国することになったという。但し、江長らとの当初の約束を守るために、江長の船に息子の宗健と物実を託し、信頼関係の維持、また渡海時のリスク分散を企図している。<sup>(46)</sup>ここでは春太郎が息子を伴って渡海し、交易の実際を体験させようとしていたことが窺われる。そして、彼の構築した人脈は後年まで維持されていたようであり、eによると、円珍とつながりのある唐人陳泰信も春太郎と旧知の間柄にあつたらしい。

ちなみに、fの唐女李自然は大春日淨足と結婚しているが、春太郎は春日姓で、和珥系の本宗大春日朝臣とは異なり、傍系氏族であつたと思われるので、淨足や自然との関係は不詳である。遣唐使に伴う入唐者と考えられる淨足が唐・衛禁律越度縁辺閉塞条の「共為婚姻者、流二千里」の規定にもかかわらず、<sup>(49)</sup>自然を伴って帰国できた理由も不明であり、

またこの二人の間の所生子の有無もわからないが、こうした一族の動向が春太郎のような人材を胚胎させた一因であったのかもしれない。春太郎はその後『三代実録』元慶元年十一月二十一日条で外従五位下、同二年四月二十二日条で大隅守になっている。大隅国は西海道の辺縁国で、国司の格としては低い（中国）が、十世紀以降の事例では薩摩守からの対外交易品の献上例が知られ（『小右記』長元二年三月二日条）、その他南島との交易の可能性もあったのではないかと思われる、憶説として記しておきたい。

以上の春太郎・神一郎は円仁を迎えに來た性海とは全く別行動をとっており、その帰国も円仁らの意向を付度したのではなく、独自に便船調達を試みている。したがって彼らは性海の入唐とは別の目的で、渡唐可能な便船に乗り合わせたものと考えられ、表3によると、今回の李隣徳の来日年次は不明であるが、当時彼我往來を支える唐商人の定期的な來航が続いていた。但し、この段階では國境を越える日本人の活動は唐商人の往來に依存しており、東アジア海域で日本人商人が独自に活躍するのは平安末期くらいを俟たねばならなかった。また春太郎・神一郎とともに最末端クラスとはいえ、官人の肩書を有して活動しているので、その渡海は官許や朝廷の意向を背景にする要素があったと考えられる。この点は渡海僧らの後援勢力の問題とも関係する論点であり、改めて總体的に検討することにした。

論を惠萼に戻すと、惠萼の渡海は新たな通交形態を切り開くものであり、惠萼①の入唐は遣唐使には依存しない彼我往來のあり方を示す先蹤になった。管見の限りでは惠萼の最後の彼我往來になった⑤は後述の真如の渡海に伴うものであるが、史料16に見るが如く、惠萼は長安に向かう真如一行とは別れて、一年弱の在唐で明州から帰国している。この真如の渡海団は混成旅団と言うべきもので、またかつて惠萼が利用したことのある張友信の便船を用いている点は、惠萼は真如の渡海を介添える役割を果たすものであり、それ故に短期間の滞在で日本に戻ったとも考えられる。とすると、ここには惠萼が構築した唐人や唐の仏教界とのつながりがなお有効であったことが看取され、それらを結節する存在として惠萼の

同行が意味を持ったと解せられる。惠萼①の渡海で入唐した田口円覚は在唐のまま活動を続けており、円珍や真如の唐での行動にも関与している。惠萼とその周辺の人々の活動にはそうした後次の渡海者を支援する役割もあり、次に円珍や真如の入唐について検討してみたい。

### 三 円珍の入唐求法

円珍は第五代天台座主で、延暦寺を中心とする山門派に対して園城寺（三井寺）を中心とする寺門派の祖師として名高い。延暦度遣唐使の最澄・義真、承和度の円仁・円載に次いで入唐求法を行い、円仁とともに天台密教の確立に尽力した人物である。円珍に関しては優れた伝記的記述がまとめられており、入唐求法のあり方についても『行歴抄』、『天台宗延暦寺座主円珍伝』、『唐房行履録』、『天台霞標』などの関連文書が集成されている<sup>(54)</sup>。

円珍は先行する入唐僧である惠萼や惠運にも言及する場面があり、既に関係史料として利用しているものもある。このように円珍の入唐求法史料は膨大で、かつそれぞれに集成がなされているので、前二章とは異なり、ここでは関連史料の集成は行わず、まず円珍の入唐の様子を年表風に整理した上で、いくつかの論点に即して必要な史料を掲げる形で論述を進めることにしたい。

#### Ⅲ―01 『請弘伝両宗官牒案』草本第一（仁寿元年（八五二））

五月廿四日、得<sub>レ</sub>達<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>。訪<sub>レ</sub>問唐国商人張支（友<sub>レ</sub>信廻船、其年二月、已<sub>レ</sub>発帰<sub>レ</sub>唐。伏縁<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>便船人着、慨恨難<sub>レ</sub>及。便寄<sub>二</sub>住城山四王院<sub>一</sub>。

#### Ⅲ―02 『行歴抄』大中七年（八五三）仁寿三 十二月十四日条

卯辰之間、上「晨朝」、上「堂喫」粥。粥時礼文、但唱「十二為并五悔」、不「唱」仏名。卯辰之間、上「堂喫」小食、食後下「堂欲」歸房。忽然起心、円載不「久合」来、不「用」入房、且彷徨待「他来」。思已、行到「南門」看望、橋南松門路上（橋者寺門前橋也）有「師」、騎馬來到「橋南頭」、下「馬下」笠。正是留学円載并也。珍使出「門」、迎接橋北、相看礼拝、流淚相喜。珍雖「如」此、載不「多悦」。顔色黑漆、内情不「暢」。珍却念、多々奇々。若本郷人元不「相識」、異国相見、親「於」骨肉。況乎旧時同「寺比」座。今過「此間」、似「无」本情。多々奇々。相共歸院、東道西說、无「有」香味、說「導」、我在「唐国」、已經「多年」、總忘却日本語云々。都不「語話」。入夜說「導」、送「牒」与「本国太政官」、不「因」王勅、不「令」人來。珍曰、太々好々。載曰、有「人」說、珍將「来」五千兩金。珍曰、金有「何限」。

### Ⅲ—03 『行歷抄』 大中七年十二月十五日条（下略部分の次にⅠ—06が続く）

（上略・円載に伝灯大法師位の位記を渡す）當時、載捧受頂戴、喜躍无「限」、礼「謝」天台大師、拜「賀」円珍。從「此」以後、口中吐出「本国言語」、不「可」尽說。因「此」事次、具知「此人本性未」改。歸到「房裏」、更与「土物沙金」綿、絶、転益歡喜、因語「次第」。載問曰、丁滿年幾。珍曰、四十九歳。載曰、不「合」領来。多日取「厄年」、恐「路上有」煩。天涯地角、自「此」已来語得。或時円珍対「他」、試「問」天台義目、曾无「交接」。兩三度略「如」此。在後休去、更不「談話」。珍心惆悵。山宗留学、因「何」如「此」。貞元年留学円基、佯称「眼疾」、便歸「本国」、作「外州」縣綱維知事、恥「辱」宗徒。今度円載見解已爾、恐「辱」徒衆、都无「利益」。既不「及」叡山沙彌童子見解、況於「僧人」。嗚々呼々。載来「山中」經「十余（日）」、或喚「出」丁滿、問「珍身辺多少金」、或喚「小師」、偷問「金數」。（下略）

### Ⅲ—04 『行歷抄』 大中九年（八五五）齊衡二五月二十三（二十二カ）日条

（上略・長安高家店に止宿）在「此」伝「語載」、珍欲「得」東行西遊、求「上」得「學」。載伝語曰、行動不「似」此間人、莫「出行」也。

Ⅲ—05『行歷抄』大中九年五月二十五日条

丁滿入<sub>レ</sub>城、於<sub>二</sub>常樂坊近南門街<sub>一</sub>、逢<sub>二</sub>着玄法寺法全阿闍梨<sub>一</sub>。便伏<sub>レ</sub>地拝、和上恠問、若是<sub>二</sub>円仁闍梨行者否<sub>一</sub>。丁滿答<sub>レ</sub>爾。因<sub>二</sub>何事更來<sub>一</sub>。隨<sub>二</sub>本國師僧來、特尋和尚<sub>一</sub>。和尚喜歡、便領將去<sub>二</sub>青龍寺西南角淨土院和上房<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>茶飲<sub>一</sub>喫。便伝<sub>レ</sub>語來、存<sub>二</sub>問円珍<sub>一</sub>。

Ⅲ—06『行歷抄』大中九年五月二十八日条

円珍到<sub>二</sub>青龍寺<sub>一</sub>、礼<sub>二</sub>拝和尚<sub>一</sub>、并入<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>、隨喜礼拝。便於<sub>二</sub>院中<sub>一</sub>、喫茶飯了。和尚問曰、將<sub>二</sub>去大儀軌<sub>一</sub>、抄取得否。珍対曰、不敢自擅。和尚便入<sub>二</sub>灌頂道場<sub>一</sub>、開<sub>レ</sub>厨取<sub>レ</sub>本、過<sub>二</sub>与円珍<sub>一</sub>。又入<sub>二</sub>房坐<sub>一</sub>、略<sub>二</sub>說五大種子<sub>一</sub>、及以<sub>二</sub>手印等<sub>一</sub>。珍隨<sub>二</sub>分記得<sub>一</sub>、將<sub>二</sub>瑜伽本<sub>一</sub>出<sub>レ</sub>寺、歸到<sub>二</sub>春明門外高家店<sub>一</sub>写。怕<sub>二</sub>他惡人<sub>一</sub>、不敢更往<sub>二</sub>阿闍梨院<sub>一</sub>。其載座主、彼十九日、到<sub>レ</sub>城、權下<sub>二</sub>崇仁坊王家店<sub>一</sub>。

Ⅲ—07『唐房行履錄』卷中 在唐目錄

緣身不<sub>レ</sub>調、經<sub>二</sub>三五七日<sub>一</sub>、爾觀和尚。和尚歡喜且借<sub>二</sub>与件大瑜伽本<sub>一</sub>。乍<sub>レ</sub>喜戴<sub>二</sub>婦店<sub>一</sub>、夜中無<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>渴仰<sub>一</sub>、手抄印名、略涉<sub>二</sub>三卷<sub>一</sub>了。經<sub>二</sub>兩宿許<sub>一</sub>、和尚親到<sub>二</sub>店下<sub>一</sub>、教示曰、爾住<sub>二</sub>店中<sub>一</sub>、写<sub>二</sub>文書<sub>一</sub>。恐<sub>二</sub>街家所由<sub>一</sub>、勘<sub>二</sub>責來<sub>一</sub>由、事触<sub>二</sub>老僧<sub>一</sub>。早返<sub>二</sub>瑜伽本<sub>一</sub>。再三返、珍諮曰、抄写不<sub>レ</sub>日合了之。還給<sub>二</sub>本了<sub>一</sub>、歸<sub>レ</sub>寺。其後不<sub>レ</sub>日畢、手奉<sub>レ</sub>還焉。

Ⅲ—08『行歷抄』大中九年十月三日条

入<sub>二</sub>金剛界灌頂<sub>一</sub>。当夜夢、從<sub>二</sub>壇上諸尊脚足底下<sub>一</sub>、一流<sub>二</sub>白乳<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>円珍口<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>明旦<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>人說<sub>一</sub>。從此以後、和尚一切如<sub>レ</sub>法、決<sub>二</sub>疑往復<sub>一</sub>、諸事惣得。說云、鄉賊与<sub>二</sub>爾甚妨難<sub>一</sub>、都不<sub>レ</sub>欲<sub>二</sub>得成就<sub>一</sub>。ム暫時取<sub>二</sub>彼他語<sub>一</sub>、惱<sub>二</sub>乱大德<sub>一</sub>、此ム錯処云々。珍第二遍見<sub>二</sub>和尚時<sub>一</sub>、具知<sub>二</sub>賊事<sub>一</sub>、佯<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>之。但<sub>二</sub>尽礼慶<sub>一</sub>和尚感<sub>レ</sub>之。在<sub>二</sub>後具說一切事<sub>一</sub>、委曲知<sub>レ</sub>之。珍不<sub>レ</sub>敢說。和上說、者賊久在<sub>二</sub>剡県<sub>一</sub>、養<sub>二</sub>婦蘇田<sub>一</sub>、養<sub>二</sub>蠶養兒<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>心入<sub>二</sub>城<sub>一</sub>、纔見<sub>二</sub>珍來<sub>一</sub>、作<sub>二</sub>

鬼賊、趁逐入來。巨耐巨耐。所說甚多。向後諸事一切不教賊知之。從天台相見之日、至平長安、忽有無量事、不用具記。

Ⅲ—09 吉永藏目錄「金剛頂瑜伽真実教王成身會品」第一  
載留學与珍、學兩部大法。而於此賢劫十六及二十三天印、面不受學之。赴他人齋、廻日写所珍手記也。故記之。

Ⅲ—10 『智証大師將來目錄』大中十年（八六五）齊衡三）秋月（八月十三日か）

〔円覺〕出遊、往到広州、遇本國商人李英覺・陳太信等、附送前件信物。今將本國、永充供養。

Ⅲ—11 『天台宗延曆寺座主円珍伝』大中十年条

円珍尋訪旧事、祖師最澄大法師、貞元年中、留錢帛於禪林寺造院、備後來學法僧侶。而会昌年中、僧人遭難、院舍隨去。仍將右大臣給円珍宛路糧沙金三十兩、買材木、於國清寺止觀院、備長講之設。又造三間房、填祖師之願、即請僧清觀為主持人。

Ⅲ—12 大中十二年閏二月台州公驗案（平安遺文）一二四号）

（上略）小師閑靜・擇宗、先未受戒。蒙前使裴端行賜給所由、往於東都、十二（一カ）年三月八日求受具戒訖。（下略）

Ⅲ—13 『行歷抄』天安三年（貞觀元）八五九）正月十六日条

召入内、対見龍眼。並將兩部曼荼羅像幀、着殿上御覽。仁座主前在内見、次二大臣、右大弁、右大將、宗叡師兄、同見曼荼羅。其二像便留太政御消費司了。便出内裏、更見太政・右兩大臣。當時歸寺。此日兩處施物。



Ⅲ—14 『三句大宗』 背書 大中十年正月一日条

(上略) 又夢、珍等行路、路上過時、未喫飯、到否教作飯。當時日近中頭、而智豐逐便來、顔色憂愁、多在困乏、以乞飲食。延福亦爾。珍不肯与飲、兩人徘徊不去也。

Ⅲ—15 『天台宗延曆寺座主円珍伝』 元慶六年条

差僧三慧入唐、重令搜写闕經三百四十余卷。先後和尚所写伝經論章疏目錄、文多不載。

Ⅲ—16 『三代実録』 元慶元年十二月二十一日条

是日、令大宰府量賜唐人駱漢中并從二人衣糧。入唐求法僧智聰在彼廿余載、今年還此。漢中隨智聰來。智聰言曰、漢中是大唐处士、身多伎芸。知其才操、勸令同來。不事蹠求、独取艱澁。願加優恤、以慰旅情。詔依請焉。

Ⅲ—17 『天台宗延曆寺座主円珍伝』

其後入唐沙門智聰帰朝語云、智聰初随留学和尚円載、乘商人李延孝船過海。俄遭惡風、舳艫破散、円載和尚及李延孝等、一時溺死。時破舟之間、有一小板、智聰黨得乘著之。須臾東風迅烈、浮查西飛、一夜之中漂着大唐温州之岸。其後亦乘他船、来帰本朝。於是計円載和尚没溺之日、正是和尚悲泣之時也。天下莫不歎異。

Ⅲ—18 『扶桑略記』 貞觀十九年(元慶元)閏二月十七日条

延曆寺僧伝灯大法師位済詮、伝燈満位安然・玄昭・観漢等四人、給伝食馭馬、令向大宰府。縁済詮等求法入唐也(安然和尚受記云、安然以貞觀十八年二月、有入唐事。私云、若貞觀十九年歟)。智證大師伝云、惣持院十禪師済詮將入唐求法并供養五臺山文殊。主上及公卿、多捨黄金、以為供養文殊之資。済詮辞山之日、

表4 円珍の入唐求法 略年表

嘉祥3年(850)	
春	: 円珍37歳。夢告で山王明神が入唐求法を勧める
仁寿元年(851)	
春	: 山王明神が再び入唐求を勧め、円珍は上表して渡唐許可を得る
3月9日頃	: 内供奉十大禪師に補任され、入唐に備えて僧位記と補任の治部省牒を特別に下賜される(→唐に持参する公験とする)
4月15日	: 出京して大宰府に下向
5月24日	: 大宰府に到着→便船がなく、月糧を給付され、城山四王院に寄住
仁寿2年(852)	
閏8月	: 唐国商人欽良暉・王超・李延孝らの交関船が到来
仁寿3年(853=大中7)	
7月16日	: 博多を出帆し、肥前国松浦郡直嘉島に到り、鳴浦に停泊
8月9日	: 進発
8月15日	: 福州に到着。一行は円珍、僧豊智(32歳、後に智聡と改名)、沙弥閑静(31歳)、訳語丁満(48歳)、経生良(延福カ)(35歳)・物忠宗(禪宗カ)(32歳)・大全吉(21歳)・伯阿満(28歳)の計8人。伯阿満は円珍の無事渡海を報じるために、福州より李延孝の渡航船で日本に帰国
8月21日	: 開元寺に安置され、生料を給付
8月23日	: 中天竺摩揭陀国大那蘭陀寺三蔵般若但羅に梵字悉曇章を受学
24日	: 印法などを教えられる
9月10日	: 福州より出発
12月1日	: 台州臨海郡に到り、開元寺に止宿。長老の知建は貞元20年(804)に円珍の師義真とともに国清寺で具足戒を受けた間柄であった
12月13日	: 国清寺に到着。国清寺では道邃の弟子広修の弟子物外が止観を長講
12月14日	: 円載が越州より到来し、国清寺で会う
大中8年(854)	
2月	: 天台山禪林寺に上り、定光・智顗などの関係地を巡礼 《※ 円珍は国清寺で坐夏し、天台教法300巻を書写》
9月7日	: 天台山を出発し、越州に向かう。閑静・物忠宗・大全吉は国清寺に留まる 《※ 越州では開元寺で良諝から講受を得る》
大中9年(853)	
3月	: 越州の公験を得て、進発
3月29日	: 蘇州に到着。円珍は病になり、徐公直宅に寄宿
4月上旬	: 円載が到来し、同行する
4月25日	: 蘇州の徐公直宅より出発
5月6日	: 洛陽に到着
5月15日	: 潼関にて豊智が智聡と改名
5月19日	: 円載は長安に入城し、左街崇仁坊王家店に止宿

- 5月21日 : 長安に到着。春明門外高家店に止宿  
 6月3日 : 青龍寺法全に拝見し、大瑜伽法文を与えられる  
 6月8日 : 左街崇仁坊の円載のところに寄住し、田口円覚と会う  
 7月1日 : 右街崇化坊龍興寺浄土院新羅国禅僧雲居房に移居  
 7月15日 : 円載とともに法全から胎藏界法を受学  
 10月3日 : 法全から金剛界法を受学  
     《※「今上（清和天皇）御願大曼荼羅像」を図絵》  
 11月4日 : 法全から両部大教阿闍梨位灌頂を伝受  
 11月6日 : 大興善寺で不空の骨塔を礼拝し、智慧輪から両部大曼荼羅教秘旨を諒承され、新訳持念經法を授かる  
     《※千福寺、西明寺、慈恩寺、興福寺、崇福寺、薦福寺を巡礼》  
 11月27日 : 円覚とともに長安より出発  
 12月17日 : 龍門の広化寺で善無畏の舍利塔を礼拝  
 12月18日 : 洛陽に到着。水南溫柔坊新羅王子宅に寄住  
     《※大聖善寺、敬愛寺、安国寺、天宮寺、荷澤寺を巡礼》

#### 大中 10 年 (856)

- 正月13日 : 円覚と龍門西崗を廻至し、金剛智の墳塔を礼拝。さらに白居易の墓を見る  
 正月15日 : 洛陽を出発。僧伽和尚ゆかりの泗州普光寺に到る  
     《※蘇州に到着し、徐公直宅に滞在》  
 5月17日 : 蘇州の徐公直宅より出発  
 5月23日 : 越州に到着。開元寺に廻至し、良諤と会い、天台法文を捨与される。次いで天台山に向かう  
 6月4日 : 国清寺に廻至  
     《※藤原良相から路粮として給付された砂金30両で材木を買い、国清寺止観院に止観堂を建立→9月7日完成》

#### 大中 12 年 (858 = 天安 2)

- 2月初頭 : 台州にて經論目錄に判形をもらう  
 6月8日 : 商人李延孝の船で帰国の途に就く  
 6月19日 : 肥前国松浦郡旻美桑埵に帰着  
 6月22日 : 大宰府鴻臚館に廻至  
 12月27日 : 入京

#### 天安 3 年 (貞観元 = 859)

- 正月16日 : 清和天皇に御願胎藏金剛界大曼荼羅を献上

「拜別和尚、便問大唐風俗、兼將習漢語。和尚默然、无一所對。濟詮深有恨色、起座。和尚語門人言、此師雖有才弁、未曉空觀。入唐之謀、似銜名高。若心殿未掃、何得三尊之加持。若加持不至、何踰万里之險浪。濟詮果不着唐岸、又不知所至。和尚先識機鑒、皆此類等也。

円珍は延暦度遣唐使の最澄の請益に同行し、初代天台座主になった義真の弟子で、遮那業出身、比叡山の真言学頭に推されており、手に印を結び口に真言を唱え、心を一点に集中して瞑想する密教の行法を天台宗の中に取り込み、台密を完成させる使命を負っていた。唐・大中十二年閏二月乞台州公驗案（『平安遺文』一二四号）によると、円珍の入唐求法は「当朝藤侍郎相公（良相）、專与執奏、大尉相公（良房）同力主持」によつて勅許されたといひ、第一章でも触れたように、「精熟真言」していた藤原良相、そしてその兄で廟堂の中心にいた藤原良房の後援によつて実現したものである（表2、史料11も参照）。この頃、良房は惟仁親王（清和天皇）立太子を企図しており、表4や史料13に看取されるように、惟仁親王の無事生育を祈願して御願両部曼荼羅像を唐で作成させることも計画に入っていたと考えられる<sup>56</sup>。

表4によると、円珍の入唐求法は天台宗では越州開元寺の良諲、密教に関しては長安青龍寺の法全を中心に伝授を得ており、こうした受学受法、諸經典の入手や校勘、そして真言五祖（金剛智、善無畏、一行、不空、惠果）に対する礼拝供養などを柱とするものであったと解される。円珍が入唐した時期は会昌の廢仏が終息し、新皇帝宣宗による仏教復興が進む氣運にあり、惠運や惠萼、また円仁のような廢仏の辛苦を経験することはなかった。円珍には七名の随行者がおり、經典の書写・校勘に備えた経生も同行している。訳語丁滿は円仁の従者丁雄滿で、在唐経験豊富な人物であり、法全とも顔見知りであったので（史料05）、円珍が法全から受学する上で大いに役立った（06、09）。また渡海後にも承和度の留学僧円載や惠萼①で渡海した田口円覺など、唐の事情に通じた存在が助力してくれ、往復の船旅を含めて、円滑な求法を遂げることができたと言えよう。

その円載との関係は、第一章で触れた初期天台宗の継承問題もあって、良好なものではなく、しばしば円珍を悩ませている。<sup>57</sup> 円載側の記録はなく、専ら円珍側からの描写であるが、02によると、円載は「不<sub>レ</sub>因王勅、不<sub>レ</sub>令人来」、即ち私的渡航を禁じるように進言し、遣唐使による正規の留学僧でない円珍の私的な入唐求法を見下しており、再会の当初から円珍は円載に悪感情を抱いたようである。円載の天台教学の研鑽が進んでいない様子や円珍所持の砂金への関心（03）、円載が会昌の廃仏で還俗した時に妻帯し、妻子を養う生活ぶり（08）など、唐での円載の生活に対する円珍の非難が述べられている。

円珍は頭頂が尖っていて、「靈骸」という特異な骨相を持つており、唐では「持<sub>二</sub>其頭髻<sub>一</sub>、以為<sub>二</sub>藏<sub>一</sub>往知来之用、求<sub>レ</sub>福致<sub>二</sub>利之資<sub>一</sub>」ので、旅行中に殺害されないように注意せよと忠告されたといひ（『天台宗延暦寺座主円珍伝』）、現在残されている円珍の像を見ても、異相であることがわかる。円珍は「余曾習論、隨<sub>レ</sub>方有<sub>レ</sub>之。遊<sub>二</sub>歷大唐<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>聞朝野<sub>一</sub>、自他學問、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>執論<sub>一</sub>、絶<sub>レ</sub>謗法事。若講<sub>二</sub>論疏<sub>一</sub>、值<sub>レ</sub>斥<sub>二</sub>他失錯<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>委釈<sub>一</sub>、略述而過。緣<sub>二</sub>本郷<sub>一</sub>執<sub>二</sub>聽之<sub>一</sub>、寂漠以不<sub>レ</sub>快消也。下<sub>レ</sub>講詣<sub>二</sub>房<sub>一</sub>、諮<sub>二</sub>陳前意<sub>一</sub>、座主答曰、此土風俗、護<sub>二</sub>他學意<sub>一</sub>、伝<sub>二</sub>我宗教<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>今在<sub>レ</sub>座把<sub>レ</sub>疏、聽徒多此他宗、成<sub>二</sub>名德<sub>一</sub>者、為<sub>二</sub>人情<sub>一</sub>故、屈<sub>二</sub>老閑<sub>一</sub>座。若留<sub>二</sub>心意<sub>一</sub>、決<sub>レ</sub>厭嫌斥、長<sub>二</sub>他瞋恚<sub>一</sub>、損<sub>二</sub>我宗門<sub>一</sub>。所以略過、不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>決消<sub>一</sub>。但同宗人、於<sub>レ</sub>房尽<sub>レ</sub>意、商量疏義、成<sub>二</sub>己懷抱<sub>一</sub>云々。」と記しており（『仏説觀賢菩薩行法經文句合記』卷下）、これは越州で良諍の講筵に連なつた時のことのようにであるが、円珍の探求心、討論を好む傾向を窺わせている。真言宗とは別に台密を確立するための立場もあろうが、『唐朝老宿貶<sub>二</sub>醍醐於蘇<sub>一</sub>、本国幼重（童カ）濫<sub>二</sub>甘露乎毒乳<sub>一</sub>』、『或立<sub>二</sub>十住心<sub>一</sub>判<sub>二</sub>一代教<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>此疏<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>論耳<sub>一</sub>』と（『大毘盧遮那經指帰』）、空海を厳しく批判した言辞も見られる。<sup>58</sup>

円珍は求法の証明として祖師最澄に倣つて台州の判印をもらう際にも、再三に渡り申請を行つており、時として激烈に

行動するところが看取される。その他、18にも円珍の容易には理解し難い、意固地な態度が知られる。04で円載が円珍に自由な求法を戒めたのは、唐で辛酸を舐めて、慎重に行動すべきことを悉知していた円載がそれとなく注意したものかもしれないが、これは円珍の氣に染まなかつたようであり、08・09によると、円載の悪評や受法の際の態度もあるが、長安での受学受法後は円載と行を分かつことになる。円載の処世にも不審な点はあるが、上掲の良諍の講説の考え方、また1—07を参照すると、円載は必ずしも唐仏教を全面的に評価していた訳ではなく、円載なりの視点があつたと見なされる。

なお、円珍の弟子豊智<sub>59</sub>||智聡は円珍帰国後も長く唐に滞留し、史料16の元慶元年に漸く帰朝している。この点について、14の弟子派遣や表3に看取される唐商人との関係維持による經典収集と同様、智聡の在唐を円珍の求法の継続という文脈で理解する意見もある。しかし、17によると、智聡は円載と行動をともにしていたようであり、15の「智豊」は豊智<sub>59</sub>||智聡、「延福」は経生の的良のことで、ともに円珍の下を去つて円載についていたので、夢の中のこととはいえ、円珍は彼らに敵しい態度をとつたと考えられる。表4によると、豊智は長安の手前の撞関で突然改名して智聡と名乗つたとあり、このあたりから円珍と智聡らには分裂が生じ、彼らは円載側に随行したので、円珍の憎悪の対象になつたと見なしたい。円載には彼らを引きつけるもの、学識や唐での経験があり、そこに円珍から離脱する大きな理由があつたと思われる。

1—06については、円載が新羅人と人脈を有し、日本からの渡海者にも便宜を図つていたことを窺わせると位置づけたが、表4によると、円珍は長安では新羅国禅僧雲居房、洛陽では新羅王子宅に寄住している。後者の新羅王子宅は新羅人旅行者の宿泊施設として提供されていたのではないかと推定されており、長安の雲居からの紹介で利用することができたとする説明もある。<sup>61</sup>そうした側面も考慮すべきであろうが、ここには円珍が入唐時に利用した在新羅人欽良暉（1—01参照）の紹介、あるいは円載が有していた在新羅人の人脈による要素も想定してみたい。円珍の求法が円滑に遂行された要因として、円珍の好悪は別にして、円載らが唐日本人の果たした役割は重視すべきであると思われる。

以上、円珍の入唐求法に関連して、その円滑な活動を支えた要素を整理し、円載などが在唐日本人の助力も重要であったと考えるべきことを述べた。蘇州の徐公直との関係（表4）も、前章で検討した惠尊らが築いたものであり、円珍の渡海はこうした諸条件の整備という時宜を見据えたものであったと言える。なお、10によると、田口円覚は長安からの帰路、さらに広州にまで足を延ばしており、円珍帰朝後も在唐を続け、次の真如の唐での活動も支えている。円珍と袂を分かつた智聡も真如と関係しており、唐に留まり何らかの活動を続けるという道も開けていたようである。そこで、次に田口円覚、智聡、そして円載も関係を有する真如の渡唐について検討することにした。

#### 四 真如とその一行

真如は俗名を高丘親王といい、平城天皇の皇子で、嵯峨天皇即位時には皇太子になっていたが、弘仁元年の葉子の変（平城上皇の変）で廃太子になり、三論宗の道詮の下で出家、次いで空海の弟子として真言宗の枢要な地位にも就いていた。しかし、志半ばで断たれた政治への感情を振り払うかの如くに仏教の真理を探究しようとした真如は、宗教上の疑問を解明すべく入唐、さらには天竺行きを敢行し、途中の羅越国で客死してしまう（後掲史料01など）。

真如の入唐に関しては『入唐五家伝』に「頭陀親王入唐略記」があり、伝記的考察も行われているので、ここでもまず真如の渡海経緯や入唐後の動向を年表風に整理することから始めたい。

##### IV-01 『三代実録』元慶五年十月十三日条

是日、頒下所司曰、无品高丘親王、志深真諦、早出塵区。求法之情、不遠異境、去貞観四年自辞当邦、問道西唐、乗査一去、飛錫无帰。今得在唐僧中瑾申状、偶親王先過震旦、欲度流沙。風聞、到羅越

國、逆旅遷化者。雖薨背之日不記、而審問之來可知焉。親王者平城太上天皇之第三子也。母贈從三位伊勢朝臣繼子、正四位下勲四等老人之女也。去大同五年廢皇太子。親王歸命覺路、混形沙門、名曰真如、住東大寺。親王機識明敏、學涉內外、聽受領悟、罕見其人。稟學三論宗義於律師道詮、稍通大義。又真言密教究竟秘奧、門弟子之成熟者衆。僧正壹演為其上首。詔授、伝燈修行賢大法師位。親王心自為、真言宗義、師資相伝、猶有不通。凡在此間、難可質疑。况復觀電露之遂空、顧形骸之早弃。苦求入唐了悟幽旨、乃至庶幾尋訪天竺。貞觀三年上表曰、真如出家以降四十余年、企三菩提、在一道場。竊以菩薩之道、不必一致。或住戒行、乃禪乃學。而一事未遂。余纂稍類、所願跋涉諸國山林、渴仰斗敷之勝跡。勅依請。即便下知山陰・山陽・南海等諸道、所到安置供養。四年奏請、擬入西唐。適被可許、乃乘一舶、渡海投唐。彼之道俗、甚見珍敬。親王遍詢衆德、疑難難決。送書律師道詮曰、漢家諸德多乏論學、歷問有意、无及吾師。至于真言、有足共言。親王遂杖錫就路、□脚孤行。(下略)

IV—02 『三代実録』元慶八年三月二十六日条

僧正法印大和尚位宗叡卒。宗叡、俗姓池上氏、左京人也。幼而遊學、受習音律、年甫十四、出家入道。從内供奉十禪師載鎮、承受經論。登棲叡山、無復還情。天長八年受具足戒。就広岡寺義演法師、稟受法相義。數年復歸叡山、廻心向大、受菩薩戒、誦究天台宗大義。隨田珍和尚、於園城寺受兩部大法。于時叡山主神飯口於人告曰、汝之苦行、吾將擁護。遠行則雙鳥相隨、暗夜則行火相照。以此可為徵驗。厥後宗叡到越前國白山、雙鳥飛隨、在於先後、夜中有火、自然照路。見者奇之。久之移住東寺、就少僧都実惠、受学金剛界大法、詣少僧都真紹、受阿闍梨位灌頂。自内藏寮、給料物焉。清和太上天皇為儲貳之初、選入侍東宮。貞觀四年高丘親王入於西唐、宗叡請從渡海。初遇汴州阿闍梨玄慶、受灌頂、習金剛界法。



登攀五臺山、巡禮聖跡。即於西臺維摩詰石之上、見五色雲、於東臺那羅延窟之側、見聖灯及吉祥鳥、聞聖鐘。尋至天台山。次於大華嚴寺、供養千僧。即是本朝御願也。至青龍寺、隨阿闍梨法全、重受灌頂、學胎藏界法、盡其殊旨。阿闍梨以金剛杵并儀軌法門等、付屬宗叡、用充印信。更尋慈恩寺造玄、興善寺智慧輪等阿闍梨、承受秘奧、詢求幽蹟。廻至洛陽、便入聖善寺善無畏三藏旧院。其門徒以三藏所持金剛杵并經論梵夾諸尊儀軌等授之。八年到明州望海鎮、適遇李延孝遙指扶桑、將泛一葉、宗叡同舟。順風解纜、二日夜間歸着本朝。主上大悅、遇以殊礼。當時法侶、皆望和尚之伝金剛界法胎藏界法密教、和尚於東寺教授之。学徒有數、傾懷而説。(下略)

IV—03『批記集』阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌の奥書の裏書(『大日本仏教全書』智證大師全集、仏書刊行会、一九一七年)貞元(觀力)五年、宗叡來於三井、學胎藏悉地両部法了、略授伝法訖。其後叡至禪林寺紹僧都処、有本意故更受此金剛界也。其因縁者、紹和上此実慧僧都弟子也。宗於慧大徳処、初受一字法、後受金剛界。叡云、有思本師志、故表受法志。其事後、於東七条故左大弁藤原有蔭朝臣宅珍召、在東寺叡師問案内。答曰、於紹僧都処受伝法印者。是於三井受胎藏大日尊印、更無他事。又叡写此戒儀入手了、諸瑜伽及大法等多抄取了。而入唐与円載師相話之後、叡意改变、即学取円載所対(封力)式歟人法、帰国再三封之呪詛於余(此夢中所示也)。而導或無驗、再三妬怒、再三趕躍云云。此善神所示也。後人知之。珍記。

上件伝法印事、在此之日面陳如此。而從唐帰向公輔朝臣云、珍不受伝法印、仍思返三井所受法云云。此高太夫面説也。

#### IV—04『書写請来法門等目錄』(宗叡著)

(上略)右雜書等、雖非法門、世者所要也。大唐感通六年<sup>64</sup>從六月迄于十月、於長安城右街西明寺日本留学

円載法師院「求写雜法門等目錄具如右也。日本貞觀七年十一月十二日却来左京東寺重勘定。入唐請益僧大法師位。

IV—05『都氏文集』卷三「大唐明州開元寺鐘銘一首并序」(貞觀七年二月十五日)

乙酉歲二月癸丑朔十五日丁卯、日本国沙門賢真敬造銅鐘一口。初賢真泛海入唐、經過勝地、明州治南得開元寺、可以繫意馬、可以降心猿、自就一遊、留連數月、有雲樹、有烟花、有樓台、有幡盖。禪器之類、亦多備焉。但獨闕者、榿椎而已。拳寺僧徒相共恨之。其中長老語賢真云、嘗聞、本国好修功德。若究衆治之工、以合双桀之製、從彼扶桑之域、入我伽藍之門、遍滿国土、不得不得隨喜、第二天衆不得不得驚聽。爾時賢真唯然許之、歸鄉之後、便鑄此鐘、遂遣彼寺、遂本意也。(下略)

IV—06『三代実録』貞觀九年六月二十一日条

詔以近江国滋賀郡比良山妙法・最勝兩精舍為官寺。故律師伝燈大法師位靜安所建也。靜安弟子伝燈大法師位賢真從唐還此、自申牒請預於官寺。從之。

IV—07『三代実録』貞觀八年五月二十一日条

唐人任仲元、非有過所、輒入京城。令加譴詰還大宰府上。重下知長門・大宰府、嚴閤門之禁焉。

IV—08『入唐五家伝』所載景福二年(八九三)寛平五)閏五月十五日在唐僧好真牒

在唐僧好真牒。好真伏聞、教興天竺、伝授支那。摩騰入漢、乘白馬、以駄經。僧會来吳、舍利以主乘。降統来三藏不名言、聖典章典、遐邇遍布。且好真伏困、頃頃年隨師良大德、適獲屈大唐、不幸和尚在唐遷化。好真因修駐留陪講以聽採、未若深和。今伏見上都崇聖寺長講經律弘拳大德、志在伝燈、偏灑法雨。虔誠三請、願赴本国之宗源、闡一乘之法相上。伏蒙開慈悲之路、啓提誘之方。免允力許降臨、親飛杖錫、將數百卷之真語。官舩以解覽(纜力)、庶福龍圖、社稷祥耀、遍霑雨。謹具事由申報。伏乞柏(相

表5 真如の渡唐（\*は『三代実録』、その他は「頭陀親王入唐略記」に依拠）

<b>貞観3年（861）</b>	
3月	：入唐を許可される
6月19日	：池辺院を出発し、巨勢寺に向かう
7月11日	：巨勢寺を出発し、難波津に向かう
7月13日	：大宰府の貢綿船に乗り進発
8月9日	：大宰府鴻臚館に到着
9月5日	：壹伎島に去向 ※さらに肥前国松浦郡栢島に移る
10月7日	：大唐通事張友信に造船を命じる
<b>貞観4年（862＝感通3）</b>	
5月	：造船終了し、鴻臚館に到着
7月中旬	：乗船し鴻臚館を出発し、值嘉島に向かう。一行は宗叡・賢真・惠尊・忠全・安展・禪念・恵池・善寂・原懿・猷繼、船頭高丘真岑、控者15人（伊勢興房ら伊勢氏の人々）、舵師張友信・金文習・任仲元（以上の3人は唐人）・建部福成・大鳥智丸、水手ら計60人
8月19日	：遠値嘉島に到着
9月3日	：出帆
9月7日	：明州楊扇山に到着
9月13日	：明州の役人が船上の人・物を点検
12月	：勅符が到来し、越州での滞在を許可される《※この間、入京許可を待ち、所々を巡礼》
<b>貞観5年（863）</b>	
4月	：賢真・惠尊・忠全と小師、弓手、舵師、水手らは明州より日本に帰国
9月	：入京許可が届く
12月	：長安に向けて出発 一行は宗叡・智聡・安展・禪念、伊勢興房、任仲元、仕丁・丈部秋丸《※途中、汴河が凍結して前進できないので、泗州普光寺に寄住し、僧伽和尚靈像を供養》
<b>貞観6年（864）</b>	
2月中旬	：長安に向けて再出発《※宗叡は五臺山に向かうため、ここで別れる》
2月晦	：洛陽に到着し、5日間滞在。良師を求めるも、人なし
5月21日	：長安に到着し、西明寺に安下《※円載が真如の入城を皇帝に奏聞したところ、阿闍梨を派遣して難疑解決の指示がある。6ヶ月を経ても、疑問点は解決できず、円載を介して西天竺行きを上奏し、勅許を得る》
10月9日	：伊勢興房は淮南に退廻し、処々寄附功德物の請取りを進める《※返還しない者や許す者があり、興房は揚州府に糺問を依頼する。感通6年（865＝貞観7）に宗叡が長安から帰来し、雑物を早く請取り、広州に向かうべき旨を告げるので、興房は広州に行こうとしていると、任仲元が真如の書を将来し、稽留すべからざる旨、李延孝の船で帰国すべき旨の指示がある》
<b>貞観7年（865）</b>	
正月27日	：真如は安展・田口円覚・丈部秋丸らとともに西に向かう
6月	：宗叡・伊勢興房は李延孝の船で帰国《※なお、智聡は在唐を続け、帰国せず》
7月27日	：李延孝の船が大宰府に到着。一行は63人（*）
<b>貞観8年（866）</b>	
5月21日	：唐人任仲元が過所なしで入京し、譴責を被り、大宰府に還される（*）
<b>元慶5年（881）</b>	
10月13日	：在唐僧中瓊の申状が届き、真如が羅越国で遷化した旨が判明する（*）

カ」公仁恩、特賜<sup>レ</sup>奏。牒件状如<sup>レ</sup>前。謹牒。

真如の渡海の様子は史料Ⅱ-16に詳しく、大宰府の大唐通事張友信の造船を利用し、唐への到着から入国許可取得までも張友信に依存するところが大きかった。張友信はⅠ-03・Ⅱ-10の惠運・惠萼②の帰朝時に初めて来日し、表3に看取されるように、その後何度か彼我往来を行うとともに、来日唐商人の先駆的存在であったためか、唐人来航に対するために大宰府の大唐通事に起用された人物である。<sup>(65)</sup>張友信の帰唐はこれが最後で、『三代実録』貞觀六年八月十三日条「先是、大宰府言。大唐通事張友信渡海之後、未<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>帰程<sup>一</sup>。唐人往来、亦無<sup>二</sup>定期<sup>一</sup>。請友信未<sup>レ</sup>帰之間、留<sup>二</sup>唐僧法惠<sup>一</sup>、令<sup>レ</sup>住<sup>二</sup>觀音寺<sup>一</sup>、以備<sup>二</sup>通事<sup>一</sup>。太政官処分、依<sup>レ</sup>請。」とあるように、張友信が日本に戻ってくることはなく、一方では表3に見るが如く、唐商人は陸續と来航しているので、大唐通事が存在が不可欠とされた次第であった。

張友信は肥前国松浦郡値嘉島で造船を行ったとあるが、『肥前国風土記』松浦郡値賀島条には「西有<sup>二</sup>泊<sup>一</sup>船之停二処<sup>一</sup>（一処名曰<sup>二</sup>相子之停<sup>一</sup>、応<sup>レ</sup>泊<sup>二</sup>三十余船<sup>一</sup>、一処名曰<sup>二</sup>川原浦<sup>一</sup>、応<sup>レ</sup>泊<sup>二</sup>三十余船<sup>一</sup>、遣唐之使從<sup>二</sup>此停<sup>一</sup>發、到<sup>二</sup>美禰良久之濟<sup>一</sup>（即川原浦之西濟是也）、從<sup>レ</sup>此發<sup>二</sup>船指<sup>一</sup>西度之」と記されており、東シナ海を横断する南路による遣唐使船の出発地点になっていた。Ⅰ-02では李処人がやはり楠木を伐採して船を新造したといい、「唐人等必先到<sup>二</sup>件島<sup>一</sup>、多採<sup>二</sup>香藥<sup>一</sup>以加<sup>二</sup>貨物<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>此間人民觀<sup>一</sup>其物<sup>一</sup>」。又其海浜多<sup>二</sup>奇石<sup>一</sup>、或鍛練得<sup>レ</sup>銀、或琢磨似<sup>レ</sup>玉。唐人等好取<sup>二</sup>其石<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>曉<sup>二</sup>土人<sup>一</sup>。」とも報告されており（『三代実録』貞觀十八年三月九日条）、造船や航海技術だけでなく、唐商人は日本人が気づいていない資源利用方法にも通曉していたようである。

真如自身の入唐目的やその行程は史料01・表5の通りであるが、ここでは真如と行をともした他の僧侶の動向を検討してみたい。惠萼については上述したところであり、唐での足跡が知られる宗叡と賢真に触れる。宗叡は『入唐五家伝』にも史料02とほぼ同文の「禪林寺僧正伝」があり、入唐五家の一人に数えられている。02下略部分によると、宗叡は「性

沈重、不<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>言談。當<sup>二</sup>於<sup>一</sup>齋食、口不<sup>レ</sup>言<sup>一</sup>濃淡。未<sup>レ</sup>嘗寢脫<sup>一</sup>衣裳、念珠不<sup>レ</sup>離<sup>一</sup>手。」という人物で、清和太上天皇の信頼が篤く、出家後の引導を行ったとされる。表5および02によれば、宗叡は汴州で長安に向かう真如一行と別れて、五臺山に道をとったといい、当初から真如とは求法目的を異にしていたようである。02には五臺山で様々な奇瑞を得たことが記されているが、これは成尋の『参天台五臺山記』卷五熙寧五年十一月二十七・二十八日条に書写された参詣者たちの壁記と相通じるもので、その真偽は不明とせねばならない。なお、この五臺山参詣は大華嚴寺での千僧供養が「是本朝御願也」とあるように、清和天皇の意を体したものであった。

その後、宗叡は長安に赴き、真如一行と合流したらしく、真如と同様、承和度の留学僧円載の助力を得ている。前章で見た円珍と円載の關係、円載の惡評とは異なり、ここでは円載は真如など日本僧と唐の朝廷とを仲介する役割を果たしており、西明寺に居住して日本僧の世話をするができるだけの立場にあったことが知られる。その円珍との關係では、宗叡は円珍から兩部大法を受學していた。但し、02によると、宗叡は天台宗から出發しながらも(Ⅲ—13に「宗叡師兄」とあるように、円珍と同じく義真に師事)、様々な宗派の人々に受學受法しており、特に密教に関しては入唐後も複数の学匠に伝授を求めている。これは円珍の求法にも同様のあり方が看取でき、01・表5の真如の求法もやはり密教の真髓を究めようとするものであり、真如や宗叡は日本の密教に物足りなさを感じていたのではないかと思われる。

03の貞觀五年には宗叡は入唐求法中であつたから、03の年次には誤りがあると考えられるが、03には宗叡が円珍から受法を完遂しないままに、実惠系の禪林寺真紹に就學したことが非難されている。03は円珍の著作であり、特に宗叡が唐で円載と接近したことは問題視されており、宗叡が円載から學んだ方法で円珍を呪詛しようとしたが、効果がなかったと述べられているのは、Ⅰ—06・07、Ⅲ—08などと同じく、円載の惡行を喚起しようとするものであろう。したがってこれは額面通りには受け入れられず、むしろ円載の學識に魅了されるところがあつたために、宗叡は円珍よりも円載の方を支持

したと考えられる。04によっても、宗叡が円載に親しんでいた様子は看取され、真如の求法援助ともども、円載の学匠としての力量には見直しが必要である。<sup>68)</sup>

表5によると、宗叡は長安から淮南に先行した伊勢興房に真如の指示を伝える役割を果たしている。興房は真如の母方の一族で、真如の渡海には控者として伊勢氏の者十五人が同行しており、興房はその筆頭となる人物であつたらしい。興房は『三代実録』貞観十四年五月二十二日条では前筑後少目従七位上で渤海使の領帰郷客使通事、元慶七年正月一日条でも存問渤海客使の通事になつたとある（時に前筑後少目従八位上とあるのは、どちらかが位階に誤記があるか）ので、上述の春太郎（春日宅成）と同様、帰国後は在唐経験を生かした役割に起用されていたことがわかる。興房は宗叡から広州行きの指示を伝達されたといひ、これは真如の天然行きの準備を進めるためか、あるいはI—01に描かれた上述の春太郎と同様に、交易活動に従事するためかは不詳である。但し、宗叡の次に任仲元が到来し、その指示によると、興房は宗叡・任仲元とともに李延孝の船で日本に帰国すべきことを命じられており、このあたりの事情はよくわからない。<sup>69)</sup>

07によると、任仲元は李延孝の船で来日した上で、真如の動向を直接報告するためか、畿内にまで入ろうとして、朝廷から追却されている。この年四月十一日には瀬戸内海地域に海賊追捕命令が出されており、唐人が勝手に関門之禁を犯すことは認められなかった。ただ、ここには応天門の変をめぐる藤原良房・基経と伴善男・藤原良相との対立があり、両派には海上交通や対外関係に関する方策でも相違があつたので、特に良房は前代の王権に連なる真如の動向にも敏感になつたのではないかとする見方もある。<sup>70)</sup>

次に05・06には賢真の動向が知られる。賢真は真如らの長安上京には同行せず、惠萼らとともに明州から帰国している。半年間程の在唐であり、当初から明州あるいは越州で唐の仏教界と接した上で、<sup>71)</sup> 早々と帰国する計画であつたと考えられる。06によると、賢真は法相宗の静安（元興寺）の弟子で、真如の渡海団が様々な目的・宗派の人物によつて構成さ

れていたことを改めて認識させてくれる。05の明州開元寺への鐘の寄贈は他の史料に見られない逸話であり、どのようにして鐘を送ったのか不明であるが、開元寺の鐘の欠如は会昌の廃仏の余燼を窺う材料になる。賢真の正確な渡海目的は不詳とせねばならないが、入唐を契機とする唐の仏教界との関係形成や帰国後の交流維持の事例として留意したい。

真如自身の入唐求法や天竺行きの詳細には不明の部分が多いので、真如とともに渡航した人々の活動を探ってみた。前章で触れた田載や智聡の在唐活動はもうしばらく続き（Ⅲ—16—17）、この他にも01で真如死去の風聞を齎した中瓊のような在唐僧もいたことが知られる。中瓊は寛平度の遣唐使計画とも関係して登場する人物で、唐滅亡後も中国に滞留して、日本朝廷に情報を送り、砂金の賜与を得ている（『日本紀略』、『扶桑略記』延喜九年二月十七日条）。08の好真も同様の事例である。好真は師の師良大徳とともに入唐したが、師良が唐で死去してしまったので、単身在唐して様々な講席に陪聴して修行を続けているのだという。彼らはともに渡海時期、事情不明であるが、当時こうした形の在唐日本僧が何人かいたことがわかり、興味深い。

この好真は08で長安崇聖寺の弘拳大徳の日本行きを推挙し、入国許可を依頼しており、これは『入唐五家伝記』所載の大宰府宛寛平五年八月十六日官符で許可されている。『菅家文草』卷九寛平六年九月十四日「請令諸公卿議定遣唐使進止状」には「在唐僧中瓊去年三月附商客王訥等所到之録記」が見えており、08の好真牒もあるいはこの王訥に付託されて日本に届いたのかもしれない。中瓊は温州刺朱褒の意、さらにはその背後にある唐朝廷の来貢要求を得て連絡をとったものであり、王訥の役割に弘拳大徳の随伴が含まれていたとすると、寛平度の遣唐使派遣計画をめぐる唐側からの接近をもう少し敷衍することができそうであるが、記録には残らないものも含めて、当時唐商人の来航が複数存する場合も見られるので（表3）、好真牒の付託や弘拳大徳の随伴と王訥の関係は必ずしも確定的とは言えない部分もあり、保留しておきたい。

なお、師や渡海団の中心人物が死去した後も、残りの人々が活動を続ける事例としては、延長五年に後唐に渡航した興福寺寛建の一行を挙げることができる。<sup>(13)</sup> 彼らは唐滅亡後、五代十国の混乱から宋による統一までの動乱期に渡海したという事情もあり、中国に留まり、日本には帰国できなかった。そのうちの一人、超会は五代十国の混乱を乗り切って宋代までの中国を体験し、開封の左街天寿寺に居住しており、最初の入宋僧である裔然と邂逅し、寛建一行のその後を伝えることができてゐる（『鵝珠抄』一一「裔然在唐日記」逸文）。但し、「超会雖有談話志、本朝言語皆以忘却。年八十五云々。」と記されており、五十年以上の滞在でもはや祖国の記憶も薄らいでいたと思われる。一方ではそこに国境を超越した活動や意識の醸成を読み取ることもできるが、それは九世紀中葉頃から散見する、遣唐使には依拠しない入唐求法や渡海交易者の行動を前提として可能になったものである点に留意しておきたい。

### むすびにかえて

小稿では事実上の最後の遣唐使になった承和度遣唐使以降に散見する、遣唐使に依拠しない九世紀の入唐者の存在に着目して、特に入唐求法僧を中心に、十世紀以降の巡礼僧への展開を考える材料を整理した。承和度遣唐使の帰国直後から始まる惠萼、惠運の渡海、そして円珍の入唐求法、真如一行の入唐と複数の目的を持った活動のあり方、またその他の史料にかいまみられる渡海時期・事由不明の人々の存在などである。

#### g 『三代格』卷十八天長八年九月七日官符

応<sub>レ</sub>檢<sub>二</sub>領新羅人交関物<sub>一</sub>事。右被<sub>二</sub>大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原真人夏野宣<sub>一</sub>、偶、奉<sub>レ</sub>勅、如<sub>レ</sub>聞、愚闇人民傾<sub>二</sub>覆櫃運<sub>一</sub>、踊貴競買。物是非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>輒。簞弊則家資殆罄。就<sub>二</sub>外土之聲聞<sub>一</sub>、蔑<sub>二</sub>境内之貴物<sub>一</sub>、是実不<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>捉搦<sub>一</sub>。



所致之弊。宜下知大宰府嚴施禁制、勿令輒市。商人來着、船上雜物一色已上、簡定適用之物、附駝進上。不適之色、府官檢察、遍令交易、其直貴賤一依估價。若有違犯者、殊処重科、莫從寬典。

h 『文德實錄』仁寿元年九月乙未条藤原岳守卒伝

（上略）《承和》五年為左少弁、辭以停耳不能聽受。出為大宰少貳、因檢校大唐人貨物、適得元白詩集奏上。帝甚耽悅、授從五位上。（下略）

i 『統後紀』承和九年正月乙巳条

（上略）是日、前筑前国守文室朝臣宮田麻呂、取李忠等所齎雜物。其詞云、宝高存日、為買唐国貨物、以絶付贈、可報獲物、其數不虧。正今宝高死、不由得物实。因取宝高使所齎物者。縱境外之人、為愛土毛、到來我境、須欣彼情、令得其所。而奪廻易之使、絶商賈之權、府司不加勘發、肆令并兼、非失賈客之資、深表無王憲之制。仍命府吏、所取雜物、細碎勘錄、且給且言。兼又支給糧食、放歸本郷。

j 『三代格』卷十九延喜三年八月一日官符

應禁遏諸使越関私買唐物事。右左大臣宣、頃年如聞、唐人商船來着之時、諸院諸宮諸王臣家等、官使未到之前遣使爭買。又郷内富豪之輩心愛遠物、踊直貨易。因茲貨物價直定准不平、是則関司不慥勘過、府吏簡略檢察之所致也。律曰、官司未交易之前私共蕃人交易者准盜論、罪止徒三年。令云、官司未交易之前不得私共諸蕃交易。為人糾獲者、二分其物、一分没官。若官司於所部捉獲者、皆没官者。府司須因准法条、慎其檢校。而寬縱不行、令人狎侮、宜更下知、公家未交易之間嚴加禁遏、勿復乖違。若猶犯制者、没物料罪、曾不寬宥。

惠尊は橘嘉智子、惠運は藤原順子の後援によって渡海しているが、彼女らはいずれも当時の仁明天皇周辺の人物である。上述のように、仁明天皇は唐文化に通曉しており、桓武朝→嵯峨朝の唐風化推進やgの舶載品への憧憬の時代に生育した仁明は、hの逸話にも窺われるように、唐物の獲得を重視している。延喜十四年の三善清行の意見封事十二箇条には、「仁明天皇即位、尤好奢靡」、雕文刻鏤、錦繡綺組、傷農事、害女功者。朝製夕改、日變月悛、後房内寢之修、飫宴調榮之儲、麗靡煥爛、冠絶古今。府帑由是空虚、賦斂為之滋起。於是天下之費、二分而一。」(『本朝文粹』卷二)と非難されており、国史を見る限りは、当時それ程奢侈の風が問題になっていたとは思えないが、これも唐物愛好によって惹起された現象であるのかもしれない。<sup>(75)</sup>

iによると、こうした唐物の希求は衰えるどころか、むしろ益々盛んになっていくようであるが、g・iのような唐物獲得競争の中ではiの文室宮田麻呂事件の如き紛擾も起きている。この事件は新羅の清海鎮大使として唐→新羅→日本を結ぶ交易網を構築していた張宝高の活動に関連して、その使者来日時に筑前守であった(承和七年四月六日任、同八年正月解任か)宮田麻呂が、絶を贈して「唐国貨物」購入を依頼したことに起因し、その後張宝高が新羅王権と対立して敗死したため、かつての宝高の部下で、新羅王権側に寝返った李少貞らが来日して日本にある宝高の資産を回収しようとした際に、宮田麻呂が「去年廻易使李忠等所賣貨物」を抑留したというものである。その後の展開として、宮田麻呂は突如として謀反の嫌疑がかけられ、勅使が難波・京の宅を搜索したところ、若干の兵器が見つかり、宮田麻呂は伊豆国配流に処せられるので(『続後紀』承和十年十二月丙子・戊寅・庚辰・癸未条)、抑留事件の方の結末は不明になっている。

文室宮田麻呂はiと同年に嵯峨太上天皇死後に勃発した承和の変で処罰された参議文室秋津の一派として処断されたとも言われるが、この事件の真相は未解明の部分が多い。張宝高との交易自体は朝廷が許可しているので、宮田麻呂の交易には問題がなった筈であるが、彼が新羅人貨物を抑留し続けることで、張宝高の残党とその残党取締りに来日した李少貞

が大宰府に滞留し、新羅の内政問題に巻き込まれることの方が重大事であつたとする指摘もなされている。<sup>(78)</sup> また宮田麻呂は内豎によつて召喚され、藏人所で詰問されているので、宮田麻呂の半年強の筑前守在任は、藏人所―大藏省・内藏寮による唐物獲得の一環として、交易のために特任派遣されたもので、少し後に登場する入唐交易使の先駆的形態ではなかつたとも言われる。

k 『三代格』卷十八承和九年八月十五日官符

応<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>還入<sub>レ</sub>境新羅人一事。右大宰大貳從四位上藤原朝臣衛奏状偁、新羅朝貢其来尚矣。而起<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>聖武皇帝之代<sub>一</sub>、迄<sub>二</sub>于聖朝<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>旧例<sub>一</sub>、常懷<sub>二</sub>奸心<sub>一</sub>、苞苴不<sub>レ</sub>貢、寄<sub>二</sub>事商賈<sub>一</sub>、窺<sub>二</sub>国消息<sub>一</sub>。望請、一切禁斷、不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>境内<sub>一</sub>者。右大臣宣、奉<sub>レ</sub>勅、夫德澤泊<sub>レ</sub>遠、外蕃歸化。專禁<sub>二</sub>入境<sub>一</sub>、事似<sub>二</sub>不仁<sub>一</sub>。宜<sub>下</sub>比<sub>二</sub>于流来<sub>一</sub>、充<sub>レ</sub>糧放還<sub>上</sub>。商賈之輩、飛帆来着、所<sub>レ</sub>齎之物任聽<sub>二</sub>民間<sub>一</sub>令得<sub>二</sub>廻易<sub>一</sub>、了即放却。但不<sub>レ</sub>得<sub>下</sub>安置<sub>二</sub>鴻臚館<sub>一</sub>以給<sub>上</sub>食。

張宝高の死去による混乱と文室宮田麻呂事件の中で大宰大貳に任じられた藤原衛は四条起請を呈し、新羅人の入境を一切禁斷することを求めた(『統後紀』承和九年八月丙子条)。宮田麻呂が筑前守であつた時、大宰少貳には文室真屋(室)という者があり、宮田麻呂の交易活動遂行に強力な後ろ盾になったと思われるが、衛の方策はこうした大宰府周辺の動向、g・iで問題視される交易のあり方を牽制することが主眼であつたと考えられる。但し、kによると、朝廷は新羅人入境者に対して、『三代格』卷十八宝龜五年五月十七日官符の流来新羅人への対処に准じて充糧放還とすること、gの民間交易の規定による交易活動は認可すべきことを令しており、従来の基本方策を総合する形での対応策を示している。鴻臚館安置・供給を禁止した点では衛の起請の意に沿った部分もあるが、上述の唐物希求の風潮の中では交易は存続せざるを得なかつたのである。

ただ、承和の変、また応天門の変などを通じて、藤原良房・基経による前期摂関政治が確立し、摂関に権力が集中する

と、入唐僧の後援など、外交権の行使主体にも変化が看取される。即ち、恵尊は橘嘉智子、恵運は藤原順子の後援を得ており、また文室宮田麻呂の逸脱行為など、嵯峨太上天皇や仁明天皇の存在とは別に、複数の外交権行使が可能であったのに対して、円珍は藤原良房・良相の後援や清和天皇の勅許、真如についても清和天皇の渡海許可を得て入唐しており、以後は天皇とそれを支える摂関など権力中枢者の意向に依存する形になっているのである。ここには張宝高が新羅王権と対立した際に、日本にも後ろ盾を求めて遣使したのに対して、「人臣無境外之交」の原則でこれを退けた経験が大きく作用しており（『続後紀』承和七年十二月乙巳条、同八年二月戊辰条）、外交権の所在が改めて規定されたのではないかと考えられる。<sup>(79)</sup>

十世紀以降の渡海僧に関しては、寛建と藤原忠平、日延と藤原師輔、寂照と藤原道長の如く、摂関政治の確立に伴う、渡海僧に対する摂関家の支援という要素が顕著になる。<sup>(80)</sup> 最初の入宋僧である奝然に対しては、藤原兼家・道隆など摂関家の人々だけでなく、天皇家の人々も結縁を行っているが、やはり当時の国政担当者の権限は大きかったと見なされる。こうした十世紀以降のあり方を考える上で、遣唐使による留学・請益とは別の方法で彼我往来を行った九世紀中葉の入唐僧の出現は重要であり、そこには国政運営の構造や対外政策の変化などの要素を探る方途もあることを指摘して、小稿のむすびにかえたい。

- (1) 拙稿「菅原道真と寛平度の遣唐使計画」(『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、二〇〇八年)。なお、石井正敏寛平六年の遣唐使計画について(『情報歴史学』中央大学出版部、二〇一一年)も参照。

- (2) 佐伯有清「最後の遣唐使」(講談社、一九七八年)。拙稿a「漂流・遭難、唐の国情変化と遣唐使事業の行方」、b「承和度の遣唐使と九世紀の対外政策」(註(1)書)も参照。  
小野勝年「入唐求法巡礼行記の研究」全四卷(法蔵館、一九八九年)、E・O・ライシャワー「円仁 唐代中国への旅」(講談社、一九九九年)、佐伯有清a「慈覺大師伝の研究」(吉川弘文館、一九八六年)、b「円仁」(吉川弘文館、一九八九年)など。

- (3) 拙稿「入宋僧成尋の系譜」(『遣唐使の特質と平安中・後期の日中関係に関する文献学的研究』平成十九年度・平成二十年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(研究代表者・森公章、二〇〇九年)。  
拙稿a「劉琨と陳詠」(『白山史学』三八、二〇〇二年)、b「入宋僧成尋とその国際認識」(『白山史学』三九、二〇〇三年)、c「参天台五臺山記」の研究と古代の土佐国(『海南史学』四一、二〇〇三年)、d「宋朝の海外渡航規定と日

- (4) 本僧成尋の入国」(『海南史学』四四、二〇〇六年)。  
円載については、佐伯有清「悲運の遣唐僧 円載の数奇な生涯」(吉川弘文館、一九九九年)を参照。

- (5) 田中俊明「安祥寺開祖惠運の渡海」(『皇太後の山寺』柳原出版、二〇〇七年)は、資財帳のこの部分の記述には触れるが、円仁と張宝高の説明が殆どで、惠運の入唐求法そのものについてはあまり探求されていない。  
註(2)b拙稿。

- (6) 円行に関しては、佐藤長門「入唐僧円行に関する基礎的考察」(『国史学』一五三、一九九四年)、高田淳「國學院大學図書館蔵 入唐僧円行関係文書の紹介」(『國學院大學図書館紀要』六、一九九四年)などを参照。  
註(2)a拙稿。なお、氣賀澤保規「中国の歴史」06絢爛たる世界帝国 隋唐時代(講談社、二〇〇五年)も参照。

- (7) ライシャワー註(3)書、佐伯註(3)b書など。  
小野勝年「入唐僧圓修・堅慧とその血脈圖記」(石濱先生古稀記念『東洋学論叢』一九五八年)。円修と円珍の関係については、佐伯有清「円珍」(吉川弘文館、一九九〇年)、仲尾俊博「円修と円珍」(『日本密教の交流と展開』永田文昌堂、一九九三年)などを参照。

- (8) 初期の天台宗、特に遮那業(密教)をめぐる問題の一端は、佐伯有清「最澄と空海」(吉川弘文館、一九九八年)を参照。  
森田悌「国史の円澄伝」(『続日本紀研究』三七九、二〇〇九

- (9) 森田悌「国史の円澄伝」(『続日本紀研究』三七九、二〇〇九

- (10) 森田悌「国史の円澄伝」(『続日本紀研究』三七九、二〇〇九

年。

- (15) 小野勝年『入唐求法行歴の研究』上（法蔵館、一九八二年）一二二頁。円珍の円載に関する叙述に偏頗があることは、佐伯註（6）書を参照。
- (16) 小野註（12）論文。その他、小山田和夫「堅慧と円修」（『智証大師円珍の研究』吉川弘文館、一九九〇年）も参照。安祥寺については、松田和晃「安祥寺資財帳について」（『日本歴史』四四九、一九八五年）、京都大学大学院文学研究所二一世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」成果報告書『安祥寺の研究』I（二〇〇四年）、上原真人編『皇太後の山寺』（柳原出版、二〇〇七年）などを参照。
- (17) 佐伯註（12）書一〇一頁は、「良諳は以前に、敬文とともに、恵運の十兩の金を手にして、他の者と一緒になって、怪しからぬ文書を作り、わが天台宗を誘った」と解するが、同註（6）書一三七頁では、「他の者と一緒になって」の部分は削除されている。あるいは「こは『為他』（他）」円載に対して」と解するべきかもしれない。
- (18) 佐伯註（12）書、『智証大師伝の研究』（吉川弘文館、一九八九年）。なお、良房と良相の関係の行方については、瀧浪貞子「陽成天皇廢位の真相」（『平安京とその時代』思文閣出版、二〇〇九年）を参照。
- (20) 保立道久『黄金国家』（青木書店、二〇〇四年）一六八頁。
- (21) 一七〇頁。
- (21) 『弘法大師全集』第五輯（密教文化研究所、一九七八年）三九一～三九二頁。
- (22) 池田温『中国古代写本識語集録』（大蔵出版、一九八八年）三四六～三四七頁。
- (23) 楚州↓蘇州の校訂は小野註（3）書四卷二〇六頁による。また保立註（20）書一九二頁註（26）は、「年々」の「々」を「又」の誤写と考え、「本国に帰却し、去年、又、供料をもたらして到来す」と読むべきことを提案している。
- (24) 『高野雜筆集』は内閣文庫本、大谷大学所蔵本などの写真版を参考にし、石井正敏「九世紀の日本・唐・新羅三國間貿易について」（『歴史と地理』三九四、一九八八年）、高木神元「唐僧義空の来朝をめぐる諸問題」（『空海思想の書誌的研究』法蔵館、一九九〇年）、田中史生 a 「唐人の対日交易」（『関東学院大学経済学会研究論集「経済系」二二九、二〇〇六年）、b 「入唐僧惠尊に関する基礎的考察」（『入唐僧惠尊の求法活動に関する基礎的考察』二〇〇七年）度二〇一〇年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（研究代表者・田中史生）、二〇一一年、山崎寛士「九世紀における東アジア海域と海商」（『人文研究』五八、二〇〇七年）、大槻暢子「唐僧義空についての初步的考察」（『東アジア文化交渉研究』一、二〇〇八年）などを参照して、適宜文字の取捨を行った。なお、11～14に見

るが如く、惠萼は「萼闍梨」と表記されており、15の「惠闍梨」はそれらとは異なる表示であるが、参考のために掲げておいた。

(25)

田島公『日本・中国・朝鮮対外交流史年表(稿)』(便利堂、一九九〇年)、対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』(吉川弘文館、一九九九年)も参照。

(26)

佐伯註(19)書一七〇一八頁は、『宋高僧伝』唐杭州塩官会昌院齊安伝により、齊安は会昌二年(八四二)承和(九)十二月二十二日に入滅しているの、義空の来日は惠萼①の帰国の承和九年のことであつたと見るが、高木註(24)論文は史料14の「不頂調来、累経数歳」により、この表現は承和九年来日だと、相応しくなく、やはり承和十四年来日と見る方がよいとしており、義空は会昌の廃仏を経た唐の仏教界の荒廃を機に来日したと考えられるので、惠萼②の帰国時来日説を支持しておきたい。田中註(24)a論文は義空の来日をやはり承和十四年とし、その後程なく(十年未満のうちに)義空は唐に戻つたと見ており、それは斉衡三年前後のことであつたと推定している。

(27)

惠萼の全般的な年譜は、橋本進吉編「惠萼和尚年譜一卷」(『大日本仏教全書』遊方伝叢書、仏書刊行会、一九二二年)、保立註(20)書一四七―一五六頁などを参照。

(28)

山内晋次「航海と祈りの諸相」(『古代文化』五〇の九、一九九八年)、「航海守護神としての観音信仰」(『古代中世

の社会と国家』清文堂出版、一九九八年)など。

(29)

小野註(3)書第三卷四〇六―四〇八頁、対外関係史総合年表編集委員会編註(25)書八三頁。

(30)

佐伯有清「円珍と円覚と唐僧義空」(『最澄とその門流』吉川弘文館、一九九三年)。宝賀寿男『古代氏族系譜集成』(古代氏族研究会、一九八六年)田口朝臣の項によると、姉は権命婦(権典侍)とあり、『続後紀』承和十三年正月庚戌条・五月丁卯条に登場する田口全子に比定される。なお、保立註(20)書一九二頁は、田口円覚を惠萼と同行した弟子一人(史料06)のうちの一人と見ている。

(31)

日比野丈夫・小野勝年『五台山』(平凡社、一九九五年)、齋藤忠『中国五台山竹林寺の研究』(第一書房、一九九八年)など。なお、中田美絵「五臺山文殊信仰と王権」(『東方学』一一七、二〇〇九年)は、不空の領導による唐・代宗期の金閣寺修築にも画期を求めている。

(32)

日比野・小野註(31)書八六頁、齋藤註(31)書七八―八〇頁、大屋徳城「日本国譯沙門靈仙三蔵に関する新史料」(『靈仙と其の後の史料』(『日本仏教史の研究』東方文献刊行会、一九二八年)などは宝亀四年説、堀池春峰「興福寺靈仙三蔵と常暁」(『南部仏教史の研究』下、法蔵館、一九九二年)、高橋順次郎編「靈仙三蔵行歴考」(『大日本仏教全書』遊方伝叢書、仏書刊行会、一九二二年)、石井正敏「日唐交通と渤海」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、二〇〇一

年)などは延暦二十四年説。

(33) 拙稿「遣唐使と唐文化の移入」(註(1)書)。

(34) 保立註(20)書一一頁は、靈仙と五臺山の關係が五臺山

信仰と五臺山巡礼の直接の原型になったと見ているが、それはこうした文脈を加味した上で支持できる。なお、表2

によると、靈仙は渤海經由で何度か砂金を送ってもらつて

おり、これは円載の滞在方法のヒントになったのではない

かと思われる。但し、円載がこうした方法、また靈仙の存

在を渡海前から正確に認識していたか否かは不明である。

(35) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』(原書房、

一九八二年)、木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』

(国書刊行会、一九八九年)などによると、既に奈良時代

から文殊關係の經典は書写されている。

(36) 佐伯註(12)書二四頁は、この時に惠萼は円載に依頼され

て『唐決』を日本に齎したとする。

(37) 東野治之「鳥毛立女屏風下貼文書の研究」(『正倉院文書と

木簡の研究』塙書房、一九七七年)、李成市『東アジアの

王権と交易』(青木書店、一九九七年)、田中史生「帰化」

と「流来」と「商賈之輩」(『日本古代国家の民族支配と

渡来人』校倉書房、一九九七年)、筑前国の銀の流通と国

際交易』(松村恵司・栄原永遠男編『古代の銀と銀錢をめ

ぐる史的研究』科研報告書、二〇〇四年)など。

(38) 蒲生京子「新羅末期の張保皐の抬頭と反乱」(『朝鮮史研究

會論文集』一六、一九七九年)、石井註(24)論文、濱田

耕策「王権と海上勢力」(『新羅国史の研究』吉川弘文館、

二〇〇二年)、渡邊誠「文室宮田麻呂の「謀反」」(『日本歴

史』六八七、二〇〇五年)など。

(39) 唐商人の国籍に関しては、鈴木靖民「渤海国家の構造と

特質」(『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、

二〇一一年)を参照。九世紀の新羅人來航に対する日本側

の外交方策については、註(2) b 拙稿を参照されたい。

(40) 張友信については、拙稿「大唐通事張友信をめぐる」(『古

代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、一九九八年)、村

上史郎「九世紀における日本律令国家の対外交通の諸様相」

(『千葉史学』三三、一九九八年)などを参照。

(41) 宋代の史料であるが、『全宋文』卷千八百七十六蘇軾

二十八「乞禁商旅過外国狀」や『朝野群載』卷二十宋・崇

寧四年六月提舉兩浙路市舶司公愚などによると、「物力」

と称される資本提供者が交易船を派遣していたことが知ら

れ、徐公直と公祐の關係もそうした文脈で理解できる役割

分担であったのかもしれない。なお、註(5) d 拙稿も参照。

(42) 松原弘宣「九世紀における対外交易とその流通」(『古代国

家と瀬戸内海交通』吉川弘文館、二〇〇四年)は、このよ

うな關係が円珍から始まるとするが、惠萼の活動にその画

期を見出すことができると思われる。

(43) 唐の仏教界の概略については、藤善眞澄『隋唐時代の仏



教と社会』(白帝社、二〇〇四年)を参照。なお、佐伯註(12)書二五六―二五八頁は、円珍の『仏説観普賢菩薩行法經文句合記』に記された義空の言説により、義空が日本の僧尼が戒律を守っていないことに失望していた点を指摘している。

(44)

大屋徳城「智證大師の入唐求法」(『園城寺之研究』星野書店、一九三一年)、田島公「大宰府鴻臚館の終焉」(『日本史研究』三八九、一九九五年)二二頁は、天安三年(八五九)に比定している。松原弘宣「陳泰信の書状と唐物交易使の成立」(『続日本紀研究』三二七、一九九八年)が貞観五年に比定しており、近年では田中註(24)a論文など、この見解を支持するものが多い。なお、渡邊誠「日本古代の対外交易および渡海制について」(『東アジア世界史研究センター年報』三、二〇〇九年)は貞観二―七年のいずれかに比定している。その他、円珍の『行歷抄』天安二年十二月十七日条に「午後、從<sub>二</sub>山寺<sub>一</sub>發、日落到<sub>二</sub>上出雲寺<sub>一</sub>宿。取<sub>二</sub>葛野路<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>城北<sub>一</sub>來刑大典先在<sub>レ</sub>寺、侍候。一更、春録事來<sub>二</sub>寺中<sub>一</sub>相見。兩君各前後去。」とあり、佐伯註(12)書一七三頁、松原註(42)論文三七七頁は、春録事を播州少目とある春日宅成(春太郎)に比定し、円珍と旧知の間柄で、円珍を核とする唐商人との人脈にも連なっていたと見ている(刑大典は大宰府の大典刑部造眞鯨(平安遺文)四四六六号文書を参照)で、円珍系図(和気系図)

にも登場するように、円珍とつながりが深かった)。但し、小野勝年「入唐求法行歷抄の研究」下(法蔵館、一九八三年)三九七頁は春原姓者に比定しており、春録事の人物比定に確証はないが、春日宅成は『三代実録』貞観元年二月九日条で渤海使烏孝慎來日時、渤海通事に起用された際には少初位下で、同三年正月二十八日条で播磨少目少初位上と見えるので(播磨は大国で、少目の相当位は從八位下)、天安二年の時点で録事<sub>二</sub>目クラスは相当位が高すぎるように思われる。また史料eを貞観五年に比定できるとすれば、春日宅成の播磨少目在任期間との関係からも、この「春録事」を春日宅成に比定することは躊躇され、姑くは小野氏の見解を支持しておきたい。

(45)

佐伯有清「承和の遣唐使の人名の研究」(『日本古代氏族の研究』吉川弘文館、一九八五年)。

(46)

酒寄雅志「渤海通事の研究」(『渤海と古代の日本』校倉書房、二〇〇一年)。

(47)

松原註(44)論文はeの貞観五年を唐物使の初見としたが、田中註(24)a論文、山崎註(24)論文は『高野雜筆要集』下所収「唐人書簡」⑮の「京使」により、大中六年(八五二)仁寿二には唐物使の派遣が行われていたと見る。渡邊註(44)論文は、「京使」は東寺西院に止住した義空から來日中の徐公祐に書状を届けた使者の意とも解釈できるので、唐物使の初見はやはりeの記述であるとする(氏はe

を貞観二、七年に比定している。

(48)

『參天台五臺山記』卷八熙寧六年（一〇七三）延久五月十二日条「天晴。卯時陳詠來相定、新訳経・仏像等買し船可<sub>二</sub>預送<sub>一</sub>并賜<sub>下</sub>預大宋皇帝志<sub>二</sub>送日<sub>一</sub>本御筆文書<sub>上</sub>。至<sub>二</sub>于物実<sub>一</sub>者入<sub>二</sub>孫吉船<sub>一</sub>了。五人相共今日乘<sub>二</sub>孫吉船<sub>一</sub>了。」によると、成尋の五人の弟子たちが先行して帰国する際に、陳詠と孫吉（孫忠）のどちらが渡海を担当するか対立があったが、新訳経・仏像や宋皇帝の文書といった最も名分のあるものは成尋の通事を務めた陳詠が運ぶことにし、皇帝の信物などの物実や五人の僧侶については孫吉の船で運ぶことにするという形で決着がついたようである。このようにいわば利権を分けることで、兩人の渡海の名目を確保し、兩人との関係維持を図ることができたと思われる。なお、註(5) a 拙稿を参照。

(49)

拙稿「古代日本における在日外国人観小稿」（註(40)書）。山里純一「南島赤木の貢進・交易」、「夜光貝と檳榔の交易」

(50)

『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、一九九九年。

(51)

保立註(20)書一六二頁は、内蔵頭であつた藤原良相による仁明天皇のための「要薬」の入手という目的を示唆している。

(52)

榎本涉「宋代の「日本商人」の再検討」（『東アジア海域と日中交流』吉川弘文館、二〇〇七年）。

(53)

橋本編註(27)論文によると、『仏祖統記』大中十二年条、『仏

祖歴代通載』、『定海序志』、『補陀洛迦山伝』、『重修普陀山

志』、『重修南海普陀山志』などの中国側の史料には史料02末尾の補陀落山寺開基に関わる伝承が掲載されている。保

立註(20)書一五四―一五五頁は、惠萼が島民の「張氏」と計つて観音院を建立したとある点に注目し、この「張氏」

は史料10、1―01の張友信と関係するものであり、惠萼が中国江南の海商社会と深いつながりを有していたことを示

(54)

していると見ている。

(55)

佐伯註(12)・(6)書。

(56)

小野註(15)・(44)書、佐伯註(19)書、園城寺編『園城寺文書』第一卷智證大師文書（講談社、一九九八年）、大日本仏教全書『智証大師全集』（仏書刊行会、一九一七年）など。

(57)

佐伯註(12)書二六―二七頁、三八―三九頁、一九二―一九三頁。その他、二〇四―二〇五頁では、円珍の一族の改姓に関連して、伴善男ともつながりがあつたとされる（円

(58)

珍の母は空海の姪で、讃岐国の佐伯氏出身とされ、伴々大伴氏は佐伯氏の本宗ともつながりが深い）。

(59)

佐伯註(6)・(12)書。

(60)

佐伯有清「円珍の同族意識」（註(19)書）によると、母方の親族としての空海に対する親近感を窺わせる事例もあるという。

(61)

小野註(15)書一七頁。

(60)

佐伯註(6) 書一四八頁は、「良」(リアアン)と「延」(イアイ)は音通、「良」と「延」を「ナガ」もしくは「スケ」と読めば同訓になり、的姓で「良某」という名前であった良を延福と同一人物に比定できると見る。

(61)

小野註(15) 書八頁、註(44) 書二八八頁。

(62)

この点については、李炳魯『円珍の唐留学と新羅人』(『桃山学院大学総合研究所紀要』三四の三、二〇〇九年)も参照。佐伯有清『高丘親王入唐記』(吉川弘文館、二〇〇二年)、杉本直治郎『真如親王伝研究』(吉川弘文館、一九六五年)、田島公『真如(高丘)親王一行の「入唐」の旅』(『歴史と地理』五〇二、一九九七年)、川尻秋生『入唐僧宗叡と請来典籍の行方』(高麗大学日本史研究会編『東アジアのなかの韓日関係史』上、J & C、二〇一〇年)など。

(63)

佐伯註(63) 書一九六―一九七頁は、ここに「感通六年」とあるのは、表5の宗叡の帰国年次、またこの後文に貞観七年「感通六年に日本の東寺にいたとあることから考えて、感通五年の誤りであろうとする。なお、02に宗叡の帰国を貞観八年と記すのも同様のまちがいということになる。

(64)

佐伯註(63) 書一九六―一九七頁は、ここに「感通六年」とあるのは、表5の宗叡の帰国年次、またこの後文に貞観七年「感通六年に日本の東寺にいたとあることから考えて、感通五年の誤りであろうとする。なお、02に宗叡の帰国を貞観八年と記すのも同様のまちがいということになる。

(65)

註(40) 拙稿。

(66)

史料02は五臺山での奇跡体験に続いて、「尋至天台山」とあるが、その次には五臺山の大華嚴寺での千僧供養、そし

て長安での活動が記されており、表5の行程から見ても、宗叡が台州の天台山に参詣したとは考えられない。したがってこれも誤解が混入したものと思われる。

(67)

佐伯有清『円載と円珍』(註(19) 書一〇八―一一〇頁によると、03には「故左少弁藤原有蔭朝臣」とあり、『尊卑分脈』によれば、有蔭は仁和元年十二月に六十二歳で死去しているの、03はこれ以後の円珍の晩年の記述であるとされる。

(68)

佐伯註(6) 書一七四―一七五頁。

(69)

佐伯註(63) 書二〇四―二〇五頁は、興房の広州行きを待つていると、西天竺への渡航の都合によい季節風を逃してしまうので、真如は任仲元や智聡の案内で広州に先行しており、広州から任仲元を遣して、興房に帰国の指示を与えたと説明している。

(70)

佐伯註(63) 書二〇七―二〇八頁。松原弘宣『海賊と応天門の変』(註(42) 書、瀧浪註(19) 論文なども参照。

(71)

入唐僧にとつての越州の意味合いについては、藤善真澄『入唐僧と杭州・越州』(『参天台五臺山記の研究』関西大学出版部、二〇〇五年)を参照。

(72)

註(1) 拙稿。

(73)

朱褒については、鈴木靖民『遣唐使の停止に関する基礎的研究』(『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、一九八五年)二七一―二七六頁を参照。

(74) 註(4) 拙稿。

(75) 十世紀以降の唐文化吸収のあり方や唐物獲得については、

榎本淳一「『国風文化』の成立」、「文化受容における朝貢

と貿易」(『唐王朝と古代日本』吉川弘文館、二〇〇八年)、

河添房江『源氏物語時空論』(東京大学出版会、二〇〇五年)、

『源氏物語と東アジア世界』(日本放送出版協会、二〇〇七年)、

『光源氏が愛した王朝ブランド品』(角川学芸出版、

二〇〇八年)などを参照。

(76) 「唐物」の持つ意味合いについては、皆川雅樹「九世

紀日本における「唐物」の史的意義」(『専修史学』

三四、二〇〇三年)、「九〇十世紀の「唐物」と東アジア」(『人

民の歴史学』一六〇、二〇〇五年)、「平安朝の「唐物」研

究と「東アジア」」(『歴史評論』六八〇、二〇〇六年)、「孔

雀の贈答」(『専修史学』四一、二〇〇六年)などを参照。

(77) 李成市「東アジアの王権と交易」(青木書店、一九九七年)、

山崎雅稔「承和の変」と大宰大式藤原衛四条起請」(『歴

史学研究』七五一、二〇〇一年)、保立註(20)書、松原註

(70)論文など。

(78) 渡邊註(38)論文。

(79) 瀧浪註(19)論文が述べる良房と良相の対立、註(1)拙

稿で触れた宇多天皇・菅原道真の外交権行使に対する藤原

時平の立場など、摂関家による外交権掌握にはまだいくつ

かの紆余曲折がある。

(80) 註(4) 拙稿。

(81) 平林盛得「資料紹介「優填王所造栴檀瑞像歴史」」(『書陵部

紀要』二五、一九七三年)、石井正敏「入宋巡礼僧」(『アジ

アのなかの日本史』V、東京大学出版会、一九九三年)など。